北海道立総合研究機構
北見農業試験場年報

令和 7 年度

令和 8 年 11 月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部　北見農業試験場

目　　次

Ⅰ　概況

1 沿革 ---------- 1
2 位置 ---------- 1
3 土壌 ---------- 1
4 土地面積および利用区分 ---------- 1
5 機構 ---------- 2
6 職員 ---------- 2
7 建物 ---------- 4
8 新たに設置した主要施設および備品 ---------- 5
9 決算 ---------- 6

Ⅱ　作況

1 気象経過 ---------- 7
2 当場の作況 ---------- 11

Ⅲ　試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要 ---------- 23
1）麦類に関する試験 ---------- 23
2）畑作物に関する試験 ---------- 23
3）ばれいしょに関する試験 ---------- 23
4）牧草・飼料作物に関する試験 ---------- 24
5）栽培環境に関する試験 ---------- 24
6）病害虫に関する試験 ---------- 25
7）地域支援活動 ---------- 25
2 技術普及室の活動 ---------- 25

Ⅳ　研究発表および普及事項

1 研究発表
1）研究論文 ---------- 28
2）口頭発表 ---------- 28
3）専門雑誌記事 ---------- 29
4）著編書・資料 ---------- 29
5）新聞記事 ---------- 29
2 普及事項
1）普及奨励事項 ---------- 29
2）普及推進事項 ---------- 29
3）指導参考事項 ---------- 29
4）研究参考事項 ---------- 30
3 品種登録・特許申請 ---------- 30

Ⅴ　研究企画・場運営・広報活動

1　諸会議　---------- 31
2　各種委員会　---------- 31
3　刊行印刷物　---------- 35
4　広報活動　---------- 35
5　見学受入れ　---------- 36

Ⅵ　技術指導および研修

1　研修生の受入れ　---------- 37
2　講師派遣　---------- 37
3　職員研修　---------- 40
4　職場研修　---------- 41
5　国際交流　---------- 41

Ⅶ　その他

1　技術体系化チーム　---------- 42
2　オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム　---------- 42
3　表彰・受賞　---------- 42
4　行事　---------- 42
5　自己点検への対応　---------- 44
6　建物配置図　---------- 45
7　圃場配置図　---------- 46

Ⅰ概況

１沿革

当場は、明治 40 年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治 41 年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治 43 年には、第 1 期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和 17 年には、北海道農業試験場北見支場となり、同 19 年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和 22 年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和 25 年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和 29 年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試原々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和 31～34 年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和 33 年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和 36 年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和 39 年には、チモシー、スムーズブロムグラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。昭和 39 年 11 月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1 課 7 科となった。昭和 43 年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後 2～3 の科名変更や係の統廃合などがあり、平成 4 年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫予察科を病虫科にそれぞれ変更した。平成 8 年 3 月には、機構改革により水稲試験地を閉所、水稲に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成 10 年 4 月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成 12 年 4 月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の 2 部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壌肥料科を栽培環境科に変更した。平成 18 年 4 月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査(地域支援)を設置、総務課会計係を廃止し、主査(会計)を設置した。平成 19 年に創立 100 周年を迎え、記念事業を行った。平成 22 年からは、22 の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

庁舎を新築して、本年 3 月に旧庁舎より移転して業務を開始した。

２位置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生 52 番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約 4 ㎞の所にある（北緯 43° 45′、東経 143° 43′、海抜 196m）。また旧水稲試験地は、同町若葉町 99 番地にあり、訓子府駅停留所から西へ約 1 ㎞（海抜 136m）の所にある。

３土壌

庁舎周辺は台地上に位置し、屈斜路軽石流堆積物や火山灰が堆積して母材となり、土壌は表層に腐植を多く含む黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。旧水稲試験地の土壌は、常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫が多く、排水が比較的良好であり褐色低地土に分類される。

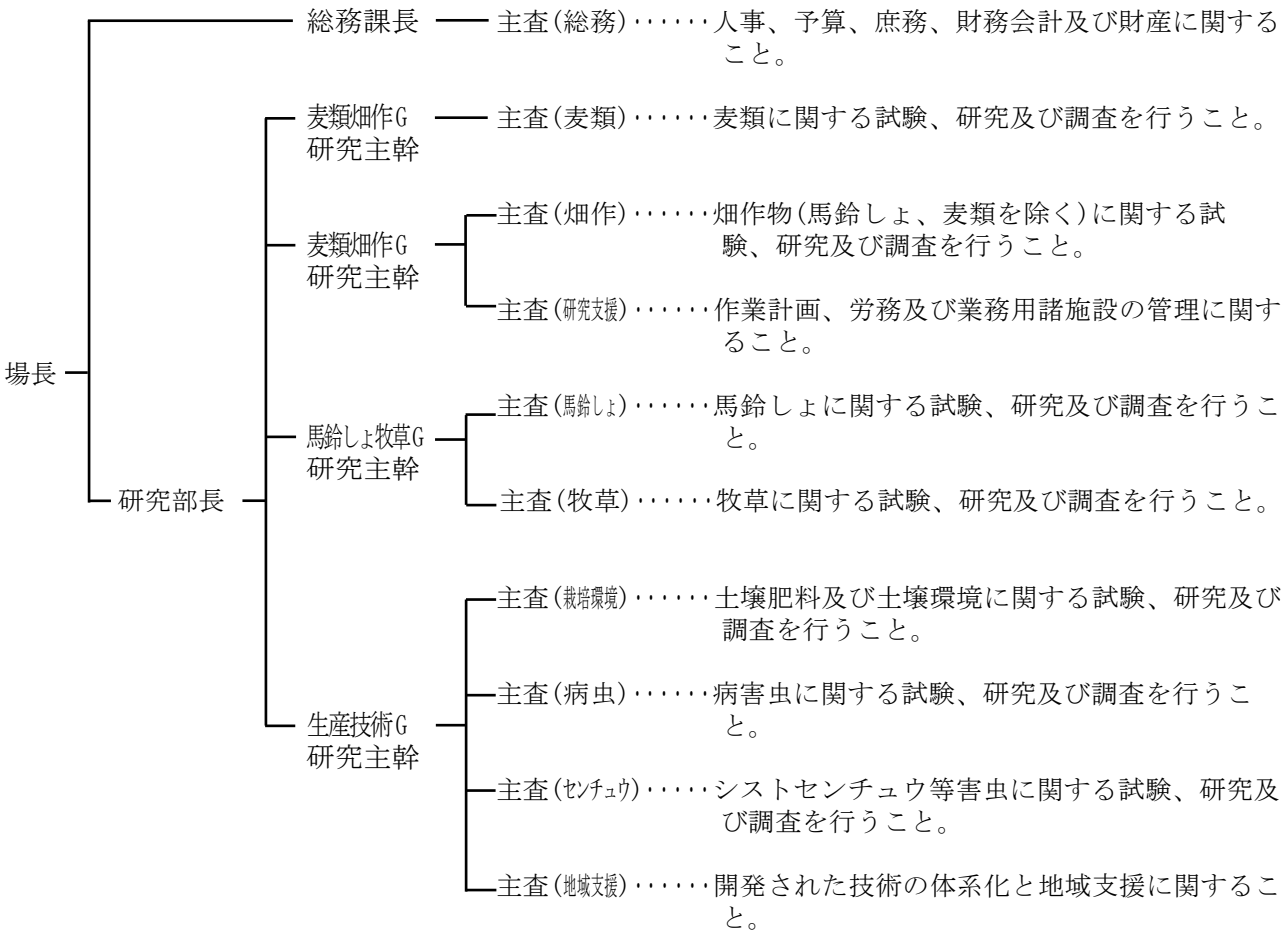
４土地面積および利用区分

総面積 1,557,688 ㎡

区分	面積(㎡)
庁舎、建物敷地	118,564
公宅用地	44,151 (道財産)
道路、用排水路	42,383
山林	300,400
試験ほ場（畑）	709,705
〃（隔離ほ場）	73,260
原野、その他	269,225

注）上記のうち 54,985 ㎡は旧水稲試験地

５機構



(道農政部技術普及室)
上席普及指導員　　主任普及指導員　　主査(普及指導)……普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に関すること。

６職員

(1)職員の配置

令和８年３月31日現在

ｸﾞﾙｰﾌﾟ別区分	場長	部長	研究主幹	麦類畑作G			馬鈴しょ牧草G		生産技術G			総務課	合計	技術普及室
				麦類	畑作	研究支援	馬鈴しょ	牧草	栽培環境	病虫	地域支援			
研究職	1	1	4	4	2		4	3	3	4	1		27	
行政職						4						5	9	3
計	1	1	4	4	2	4	4	3	3	4	1	5	36	3

(2)令和８年３月31日現在員

職名	身分	氏名	職名	身分	氏名
場長	法人職員	鈴木孝子	（馬鈴しょ牧草Ｇ）		
			研究主幹	法人職員	井上哲也
総務課長	北海道職員	古屋幸生	主査（馬鈴しょ）	〃	品田博史
主査（総務）	〃	壽永七月男	研究主任	〃	佐藤圭
専門主任	〃	井上顕伸	研究職員	〃	和﨑俊文
主任	〃	荒川雅美	〃	〃	石川圭大
技師	〃	門なつみ	主査（牧草）	〃	飯田憲司
			研究主任	〃	高畠聡史
			研究職員	〃	鈴木美玲
＜研究部＞					
研究部長	法人職員	平井剛	（生産技術Ｇ）		
（麦類畑作Ｇ）			研究主幹	法人職員	唐星児
研究主幹	法人職員	大西志全	主査（栽培環境）	〃	板垣英祐
研究主幹	〃	池谷聡	研究主査	〃	木場稔信
主査（麦類）	〃	其田達也	研究職員	〃	三和優吾
研究主任	〃	林和希	主査（病虫）	〃	小倉玲奈
研究職員	〃	斉藤涼介	主査（センチュウ）	〃	小澤徹
〃	〃	村山真也	研究主任	〃	森万菜実
主査（畑作）	〃	中川浩輔	研究主任	〃	下間悠士
研究職員	〃	雨森大	主査（地域支援）	〃	菅原彰
主査（研究支援）	〃	伊藤幸雄			
主任	〃	中出秀信	（道技術普及室）		
技師	〃	横川愁斗	上席普及指導員	北海道職員	中村浩
〃	〃	柴田匠	主任普及指導員	〃	千川明子
			主査（普及指導）	〃	飯田麻衣

(3)転入者および採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
場長	鈴木孝子	7.4.1	農業研究本部から
研究主幹	井上哲也	7.4.1	中央農業試験場から
主査（地域支援）	菅原彰	7.4.1	中央農業試験場から
主任普及指導員	千川明子	7.4.1	上川農業改良普及センターから
研究職員	雨森大	7.4.1	新規採用

(4)転出者および退職者

職名	氏名	発令年月日	備考
研究職員	佐藤優美	7.10.31	退職
研究部長	平井剛	8.3.31	中央農業試験場へ
総務課長	古屋幸生	8.3.31	胆振総合振興局へ
主査（総務）	壽永七月男	8.3.31	退職
技師	門なつみ	8.3.31	根室振興局へ
研究主幹	大西志全	8.3.31	中央農業試験場へ
研究主幹	井上哲也	8.3.31	農業研究本部へ
研究職員	鈴木美玲	8.3.31	退職
上席普及指導員	中村浩	8.3.31	退職

７建物

資産名称	建築年月	構造名	延面積（㎡）	備考
庁舎（旧）	S33.9	ブロック造	1,495.37	R8 年度解体予定
庁舎	R8.2	鉄筋コンクリート造､木造	1､484.26	
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45.7	鉄骨造	140.66	
第２号ガス貯蔵庫（旧）	S46.6	ブロック造	3.53	R8 年度解体予定
ガス貯蔵庫	R8.2	鉄筋コンクリート造	4.37	
豆類Ｄ型ハウス	S53.3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54.4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57.9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	R8 年度解体予定
参観人便所	S59.9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61.1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61.9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H3.12	木造	204.00	
普通車車庫（旧）	H4.9	鉄骨造	231.00	R8 年度解体予定
車庫	R8.2	鉄骨造	238.15	
トラクター車庫	H5.2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H5.9	木造	200.00	
共同作業室	H5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H8.12	鉄骨造	315.00	(実験室､温室､網室)
農具庫（馬鈴しょ）	H10.3	鉄骨造	199.68	(調査室､浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.3	鉄骨造	676.20	(貯蔵庫)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	
赤カビ検定用採種ハウス１	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス２	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15.1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27.3	木造	141.60	
合計			11,659.39	

※　令和７年度の延面積合計値については、年度内に新庁舎の引き渡しを受けたことから、新旧両庁舎および関連施設の面積を算入した。

８新たに設置した主要施設および備品

(1)施設

名称	形式		金額(円)	配置
庁舎	鉄筋ｺﾝｸﾘｰﾄ造､木造	北海道より出資	1,692,579,000	
ガス貯蔵庫	鉄筋コンクリート造	同上	3,520,000	
車庫	鉄骨造	同上	94,350,000	
合計			1,790,449,000	

(2)備品

名称	形式		金額(円)	配置
セールスマンデスク(2 台)	アイリスチトセ	CG300-860	286,000	麦類畑作G
試験用小型製粉機	アントンパール社	Brabender：ｸｫﾄﾞﾙﾏｯﾄｼﾞｭﾆｱⅢ	6,710,000	麦類畑作G
大型乾燥機	エスペック社	LKS-3C	4,400,000	麦類畑作G
送風定温恒温器	ヤマト科学	DKM401	207,130	生産技術G
トレーラー	遠藤企画	T3031 型	990,000	麦類畑作G
カラーレーザープリンター	Canon	LBP732Ci	145,200	麦類畑作G
ノートパソコン	HP	ProBook4 G la 16	160,600	麦類畑作G
薬品庫（病虫実験室）(2 台)	アズワン	N-180G､N180-D, N-180B	446,600	生産技術G
作業台（製粉室）(2 台)	アズワン	JCB-1575	572,000	麦類畑作G
実験器具乾燥棚（３段）		木製３段	330,000	生産技術G
実験器具乾燥棚（４段）		木製４段	363,000	生産技術G
サイド実験台		HTO-1275ST	254,100	生産技術G
モニター（３台）	SHARP	4T-C65HV1	808,500	総務課
モニター台（３台）	ウチダ	6-728-5350, 6-728-5321	392,700	総務課
実験器具収納棚（栽培環境実験室）	アズワン	VG-18060	284,900	生産技術G 馬鈴しょ牧草G
でん粉価測定装置	旭川測量機株式会社	R-2000	929,500	麦類畑作G
ビートハーベスター	日農機株式会社	RX-680	3,544,200	総務課
温水高圧洗浄機	岡常歯車製作所	MR-30-2	663,800	麦類畑作G
エアコン（小麦調査室）	三菱電機株式会社	MSZ-GV5624S-W	275,000	麦類畑作G
自動操舵システム	ニコントリンブル	GFX-1060, 960-AP-RTK	2,783,000	麦類畑作G
合計			24,546,230	

９決算（支出額）

（単位：円）

科目	予算額	支出済額	残額	備考
戦略研究費	700,000	700,000	0	
重点研究費	12,577,000	12,576,570	430	
職員研究奨励費	0	0	0	
経常研究費	25,052,000	24,738,444	313,556	
依頼試験費	0	0	0	
技術普及指導費	228,780	228,780	10,305	
外部資金等確保対策費	0	0	0	
研究用備品整備費	0	0	0	
維持管理経費(研究)	725,000	725,000	0	
研究用備品整備費(積立金)	0	0	0	
維持管理経費(一般)	35,188,647	32,750,273	2,438,374	
研究関連維持管理経費	1,296,000	1,236,000	60,000	
知的財産経費	0	0	0	
運営経費	47,055,000	46,219,569	835,837	
共同研究費	6,100,000	6,100,000	0	
国庫受託研究費	370,000	370,000	0	
道受託研究費	4,094,000	4,093,641	359	
その他受託研究費	72,180,189	72,179,243	946	
その他補助金	36,561,000	36,559,800	1,200	
維持管理経費（目的積立金）	0	0	0	
施設整備費補助金	36,231,000	36,229,600	1,340	
施設整備費(繰越積立金)	4,788,000	4,787,750	250	
科学研究費補助金	904,000	904,000	0	
合計	283,147,022	279,494,730	3,652,292	

※人件費（研究職員費・派遣職員費・準職員費）を除く。

Ⅱ　作　　況

1. 気象経過

1）融雪期以降の経過

4月上旬：最高気温は平年並で、最低気温、平均気温はやや高かった。降水量は平年よりやや少なく（平年比65%）、日照時間はやや少なかった（平年比79%）。

4月中旬：最高気温はやや高く、最低気温は極めて高く、平均気温は高かった。降水量は平年より極めて多く（平年比233%）、日照時間は平年並であった（平年比81%）

4月下旬：最高気温は極めて低く、最低気温はやや低く、平均気温は低かった。降水量は平年より多く（平年比152%）、日照時間はやや少なかった（平年比73%）。

5月上旬：最高気温はやや低く、最低気温はやや高く、平均気温は平年並であった。降水量は平年並（平年比84%）、日照時間はやや少なかった（平年比68%）。

5月中旬：最高気温は極めて高く、最低気温は高く、平均気温は極めて高かった。降水量は少なく（平年比24%）、日照時間は平年並であった（平年比99%）。

5月下旬：平均気温はやや低く、最高気温はやや低く、最低気温はやや低かった。降水量は平年よりやや少なく（平年比69%）、日照時間は平年並であった（平年比94%）。

6月上旬：平均気温はやや高く、最高気温は高く、最低気温は平年並であった。降水量は平年並であり（平年比81%）、日照時間は平年並であった（平年比100%）。

6月中旬：平均気温は極めて高く、最高気温は高く、最低気温は極めて高かった。降水量は平年よりやや少なく（平年比78%）、日照時間はやや多かった（平年比126%）。

6月下旬：平均気温は極めて高く、最高気温は極めて高く、最低気温は極めて高かった。降水量は平年より少なく（平年比58%）、日照時間は多かった（平年比150%）。

7月上旬：平均気温は極めて高く、最高気温は極めて高く、最低気温は極めて高かった。降水量は平年より少なく（平年比3%）、日照時間は平年並であった（平年比119%）。

7月中旬：平均気温は極めて高く、最高気温は極めて高く、最低気温は高かった。降水量は平年並で（平年比87%）、日照時間は平年並であった（平年比108%）。

7月下旬：平均気温は極めて高く、最高気温は極めて高く、最低気温はは極めて高かった。降水量は平年より多く（平年比177%）、日照時間は平年並であった（平年比118%）。

8月上旬：平均気温は高く、最高気温はやや高く、最低気温は高かった。降水量は平年並であり（平年比107%）、日照時間は平年並であった（平年比107%）。

8月中旬：平均気温は高く、最高気温は極めて高く、最低気温はやや高かった。降水量は平年よりやや少なく（平年比64%）、日照時間はやや多かった（平年比137%）。

8月下旬：平均気温は平年並みで、最高気温は平年並みで、最低気温はやや高かった。降水量は平年よりやや少なく（平年比68%）、日照時間はやや少なかった（平年比66%）。

9月上旬：平均気温はやや高く、最高気温はやや高く、最低気温はやや高かった。降水量は平年より極めて多く（平年比208%）、日照時間は平年並みであった（平年比87%）。

9月中旬：平均気温はやや高く、最高気温は極めて高く、最低気温は平年並みだった。降水量は平年より多く（平年比164%）、日照時間はやや多かった（平年比134%）。

9月下旬：平均気温はやや高く、最高気温はやや高く、最低気温はやや高かった。降水量は平年より多く（平年比190%）、日照時間はやや多かった（平年比125%）。

10月上旬：平均気温はやや高く、最高気温は高く、最低気温は平年並みであった。降水量は平年より少なく（平年比4%）、日照時間はやや多かった（平年比131%）。

10月中旬：平均気温はやや低く、最高気温は低く、最低気温は平年並みであった。降水量は平年

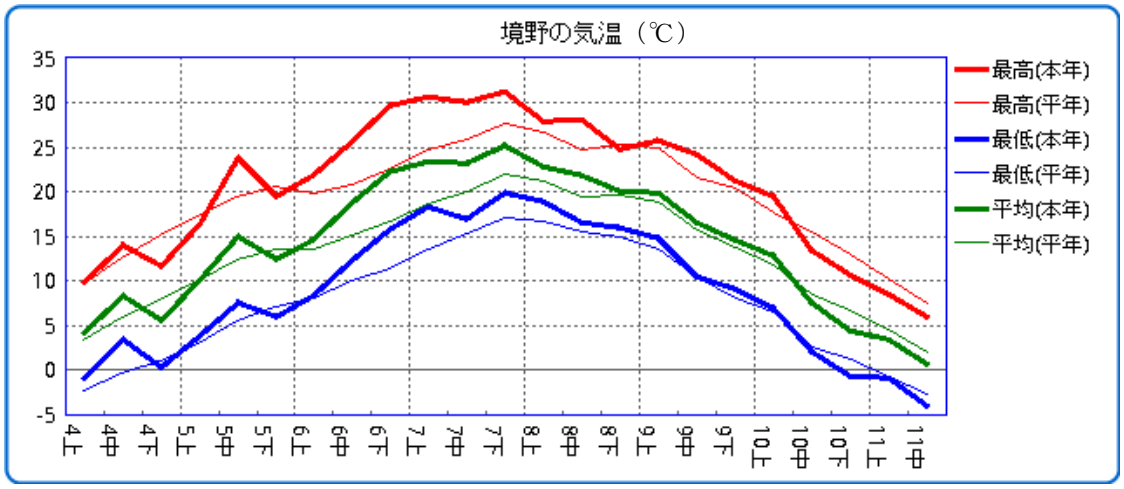
より少なく（平年比6%）、日照時間はやや少なかった（平年比60%）。

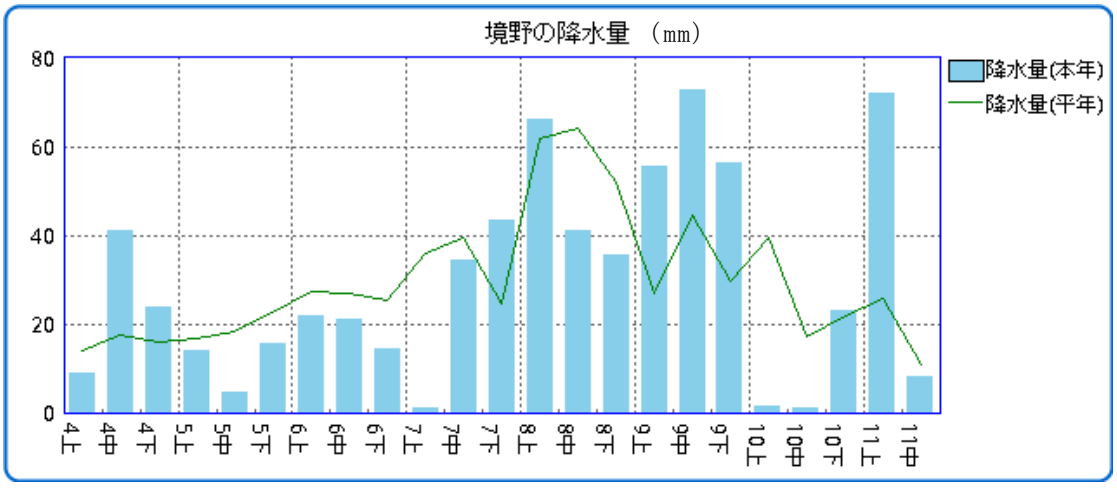
10月下旬：平均気温、最高気温、最低気温は低かった。降水量は平年並で、日照時間は平年並であった。

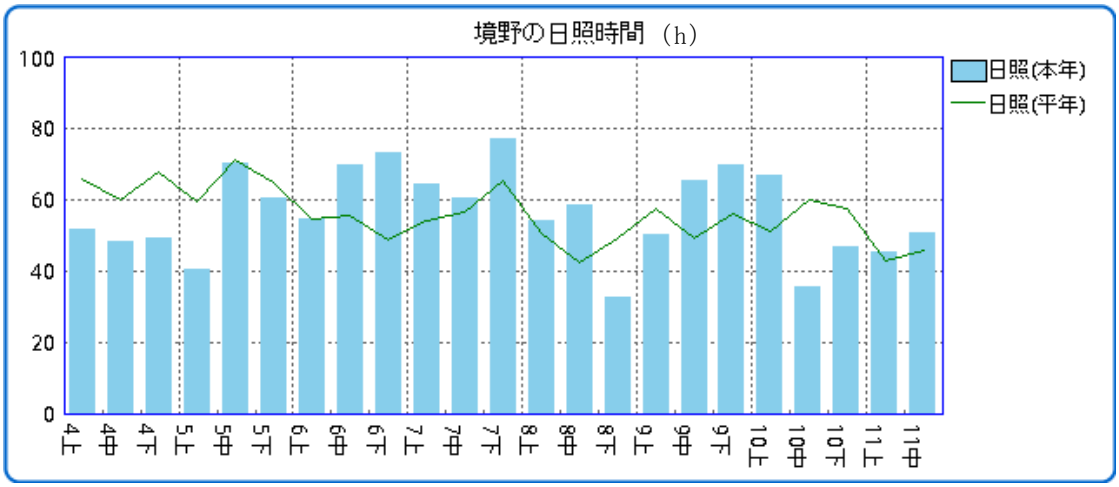
11月上旬：平均気温は平年よりやや低く、最高気温は低く、最低気温は平年並であった。降水量は極めて多く、平年並であった。

11月中旬：平均気温はやや低く、最高気温は低く、最低気温はやや低かった。降水量はやや少なく、日照時間は平年並であった。

2）気温、降水量及び日照時間の平年との比較







３）気象表

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
2025年	上旬	4.1	3.3	0.8	9.8	9.6	0.2	−1.0	−2.4	1.4	9.0	13.8	−4.8	51.7	65.7	−14.0
4月	中旬	8.2	5.8	2.4	14.0	12.5	1.5	3.4	−0.3	3.7	41.0	17.6	23.4	48.5	60.2	−11.7
	下旬	5.6	7.9	−2.3	11.6	15.1	−3.5	0.3	1.0	−0.7	24.0	15.8	8.2	49.5	67.8	−18.3
	上旬	10.0	10.0	0.0	16.4	17.2	−0.8	3.8	3.0	0.8	14.0	16.7	−2.7	40.4	59.8	−19.4
5月	中旬	15.0	12.3	2.7	23.7	19.5	4.2	7.5	5.4	2.1	4.5	18.4	−13.9	70.6	71.5	−0.9
	下旬	12.4	13.6	−1.2	19.4	20.5	−1.1	5.9	7.0	−1.1	15.5	22.5	−7.0	60.8	64.8	−4.0
	上旬	14.5	13.6	0.9	21.9	19.8	2.1	8.2	8.0	0.2	22.0	27.3	−5.3	54.7	54.5	0.2
6月	中旬	18.7	15.1	3.6	25.6	20.8	4.8	12.3	10.0	2.3	21.0	27.0	−6.0	70.1	55.8	14.3
	下旬	22.3	16.6	5.7	29.7	22.5	7.2	15.7	11.4	4.3	14.5	25.2	−10.7	73.2	48.9	24.3
	上旬	23.4	18.6	4.8	30.7	24.7	6.0	18.3	13.5	4.8	1.0	35.9	−34.9	64.4	54.3	10.1
7月	中旬	23.1	20.0	3.1	30.1	25.9	4.2	17.0	15.2	1.8	34.5	39.5	−5.0	60.8	56.4	4.4
	下旬	25.1	21.9	3.2	31.3	27.7	3.6	19.9	17.0	2.9	43.5	24.6	18.9	77.1	65.5	11.6
	上旬	22.8	21.2	1.6	27.9	26.7	1.2	18.9	16.6	2.3	66.0	61.7	4.3	54.1	50.7	3.4
8月	中旬	21.8	19.5	2.3	28.1	24.8	3.3	16.6	15.4	1.2	41.0	64.2	−23.2	58.5	42.6	15.9
	下旬	20.1	19.6	0.5	24.7	25.2	−0.5	15.9	15.0	0.9	35.5	52.0	−16.5	32.6	49.3	−16.7
	上旬	19.8	18.8	1.0	25.7	25.0	0.7	14.8	13.5	1.3	55.5	26.7	28.8	50.3	57.5	−7.2
9月	中旬	16.5	15.6	0.9	24.2	21.5	2.7	10.4	10.4	0.0	73.0	44.5	28.5	65.8	49.1	16.7
	下旬	14.5	13.8	0.7	21.3	20.3	1.0	9.1	8.1	1.0	56.5	29.7	26.8	70.0	56.0	14.0
	上旬	12.8	11.7	1.1	19.5	17.6	1.9	6.9	6.4	0.5	1.5	39.6	−38.1	66.9	51.0	15.9
10月	中旬	7.5	8.5	−1.0	13.3	15.5	−2.2	2.0	2.5	−0.5	1.0	17.1	−16.1	35.7	60.0	−24.3
	下旬	4.3	6.7	−2.4	10.7	12.9	−2.2	−0.8	1.2	−2.0	23.0	21.8	1.2	47.1	57.7	−10.6
	上旬	3.3	4.5	−1.2	8.5	10.1	−1.6	−1.0	−0.8	−0.2	72.0	25.7	46.3	45.3	42.8	2.5
11月	中旬	0.6	2.0	−1.4	5.9	7.5	−1.6	−4.1	−2.7	−1.4	8.0	10.9	−2.9	51.0	45.8	5.2

注）観測値は置戸町境野のアメダスによる（てん蔵の定期作況気象情報）。
　　10年平均は前10か年の平均値である。

４）季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初　霜	根 雪 始	通常の根雪終	積雪期間	降雪終	耕鋤始	晩霜	初　霜	無霜期間	降 雪 始
	(年. 月. 日)	(年. 月. 日)	(年. 月. 日)	(日)	(年. 月. 日)	(年. 月. 日)	(年. 月. 日)	(年. 月. 日)	(日)	(年. 月. 日)
本年	2024.10.14	2024.12.22	2025.4.7	107	2025.4.29	2025.4.22	2025.5.1	2025.10.11	162	2025.10.28
平年	10.14	12.12	4.4	114	4.26	4.21	5.12	10.13	153	11.4
比較	0	10	3	−7	3	1	−11	−2	9	−7

期間	項目	平均気温 (℃)	日照時間 (hr)	降水量 (mm)
5月上旬 ～ 9月下旬	本年	2,858.4	903.4	498.0
	10年平均	2,555.2	836.7	515.9
	比較	303.2	66.7	△ 17.9

注）農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。
　　平年値は前10か年の平均値である。

2　当場の作況

注）本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

１）秋まき小麦（令和６年９月播種）

作　況：やや良

事　由：播種期は平年より2日早い9月19日であった。出芽期は平年より2日早い9月27日であった。出芽期以降、平均気温が10月上旬から中旬は平年よりやや高く、10月下旬が極めて高く経過したため、越冬前の草丈は平年より高く、茎数は平年より多かった。根雪始は平年より10日遅い12月22日、根雪終は平年より4日遅い4月7日で、根雪期間は平年より7日短かった。作況の調査圃場は融雪剤を散布したため、融雪期は3月23日であった。雪腐病の発生は僅かに認められた。コムギ縞萎縮病が発生し萎縮症状が認められたが、融雪後の平均気温が平年に比べ4月中旬が高く、5月中旬が極めて高く経過したため、出穂期は平年より2日早い6月5日であった。6月下旬から7月中旬の気温は極めて高く推移したため、登熟は平年より早く進み、成熟期は平年より7日早い7月15日で、登熟期間は平年より5日短かった。稈長は平年よりやや長く、穂長は平年並み、穂数は平年より多かった。穂数が平年より多かったこと、6月下旬から7月中旬の日照時間が長かったことにより、子実重は平年比108％だったが、千粒重はかなり軽かった。リットル重は平年並だった。検査等級は1等であった。

これらのことから、本年の作況は「やや良」である。

品種名		令和は本年(最凶）を除く５か年の平均値。		
項目／年次		本年	平年	比較
播種期	(令和6年月.日)	9.19	9.21	△ 2
出芽期	(令和6年月.日)	9.27	9.29	△ 2
出穂期	(令和7年月.日)	6.05	6.07	△ 2
成熟期	(令和7年月.日)	7.15	7.22	△ 7
草丈（cm）	(令和6年11月20日)	22.0	15.7	6.3
	(令和7年5月20日)	42.0	38.0	4.0
	(令和7年6月20日)	73.6	81.0	△ 7.4
茎数（本/㎡）	(令和6年11月20日)	1959	1164	795
	(令和7年5月20日)	2276	1516	760
	(令和7年6月20日)	974	805	169
成熟期	稈長（cm）	81	76	5
	穂長（cm）	7.6	8.1	△ 0.5
	穂数（本/㎡）	841	732	109
子実重（kg/10a）		717	663	54
同上平年比（%）		108	100	8
リットル重（g）		777	782	△ 5
千粒重（g）		34.4	38.3	△ 3.9
品質（検査等級）		1	1	-

注）平年値は前７か年中、令和元年（最豊）、

２）秋まき小麦（令和７年９月播種）

作　況：不良

事　由：　9月の降水量が平年よりも多かったため、圃場作業が遅れ、播種期は平年より11日遅い10月1日であった。出芽期は平年より11日遅い10月8日であった。出芽期以降、平均気温が10月中旬は平年よりやや低く、10月下旬は低く経過したこと、播種期が遅くなったことにより、越冬前の草丈は平年より低く、茎数は平年より少なかった。

以上のことから、目下の作況は「不良」である。

品種名		きたほなみ		
項目／年次		本年	平年	比較
播種期	(令和7年月.日)	10.01	9.20	11
出芽期	(令和7年月.日)	10.08	9.27	11
出穂期	(令和8年月.日)		6.07	
成熟期	(令和8年月.日)		7.19	
草丈（cm）	(令和7年11月20日)	12.0	17.9	△ 5.9
	(令和8年5月20日)		39.3	
	(令和8年6月20日)		79.1	
茎数（本/㎡）	(令和7年11月20日)	353	1455	△ 1102
	(令和8年5月20日)		1748	
	(令和8年6月20日)		879	
成熟期	稈長（cm）		77	
	穂長（cm）		8.0	
	穂数（本/㎡）		784	
子実重（kg/10a）			681	
同上平年比（%）			100	
ブラウエル容積重（ｇ/L）			816	
千粒重（ｇ）			36.9	
品質（検査等級）			1	

注)平年値は前７か年中、令和元年(最豊）、令和４年（最凶）を除く５か年の平均値。

３）春まき小麦

作　況：平年並

事　由：調査圃場は融雪剤散布により3月23日に融雪期となった。播種時期の断続的な降雨により、播種期は平年より8日遅い4月23日となった。播種期が遅く、4月下旬の平均気温が低かったため、平年値より出芽期は8～9日遅かった。出穂期は2日遅かった。平年と比較して稈長、穂長は並、穂数は「はるきらり」で多かった。

7/14の強風および7/19～20の降雨により、倒伏が多発生した。赤かび病の発生は見られなかった。6月下旬～7月下旬の平均気温が極めて高く推移し、6月下旬～7上旬は降水量が平年より少なかったため、成熟期は平年より10～12日早く、登熟期間は平年より12～14日短かった。一方、6月下旬～7月下旬の日照時間は、108～150%であったため、子実重は平年比98～102%で平年並であった。千粒重は平年を大きく下回った。容積重は平年並であった。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		春よ恋			はるきらり		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	4.23	4.15	8	4.23	4.15	8
出芽期	(月.日)	5.7	4.28	9	5.8	4.30	8
出穂期	(月.日)	6.21	6.19	2	6.20	6.18	2
成熟期	(月.日)	7.24	8.3	△ 10	7.25	8.6	△ 12
草丈(cm)	(5月20日)	19.1	22.6	△ 3.5	22.1	23.6	△ 1.5
	(6月20日)	75.7	72.9	2.8	75.8	72.8	3.0
茎数(本/㎡)	(5月20日)	418	656	△ 238	397	636	△ 239
	(6月20日)	864	763	101	944	718	226
稈長(cm)	(7月20日)	90	93	△ 3	90	91	△ 1
穂長(cm)	(7月20日)	8.7	8.5	0.2	8.1	8.0	0.1
穂数(本/㎡)	(7月20日)	651	644	7	747	639	108
子実重(kg/10a)		513	521	△ 8	543	533	10
同上平年比（%）		98	100	△ 2	102	100	2
ブラウウェル容積重（g）		833	828	5	826	830	△ 4
千粒重（g）		34.3	39.8	△ 5.5	35.8	41.8	△ 6.0
品質（検査等級）		1	1	－	1	1	－

注）平年値は前７か年中、令和３年(最豊)、平成29年(最凶)を除く５か年の平均。

４）とうもろこし（サイレージ用）

作　況：やや不良

事　由：播種は平年より2日早い5月15日、出芽期は平年より7日早い5月29日であった。6月以降は高温で推移したことから生育ステージが早く進み、開花期および抽糸期は平年より12日および10日早かった。8月以降も平年並からやや高温で推移し、登熟が非常に早く進んだ。収穫期は平年より16日早い9月10日であり、収穫時の熟度は黄熟初期で平年並であったものの、稈長は平年より39cm低かった。総体の乾物率は2.3ポイント高く、乾物総量および推定TDN収量は平年比92%および94%とやや少なかった。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目		KD320		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.15	5.17	△ 2
出芽期	(月.日)	5.29	6.05	△ 7
開花期	(月.日)	7.21	8.02	△ 12
抽糸期	(月.日)	7.22	8.01	△ 10
収穫期	(月.日)	9.10	9.26	△ 16
収穫時の熟度		黄熟初期	黄熟初期～黄熟中期	-
草丈(cm)	(6月20日)	40	29	11
	(7月20日)	225	179	46
	(8月20日)	250	281	△ 31
稈長(cm)	(9月20日)*	213	252	△ 39
葉数(枚)	(6月20日)	6.1	4.7	1.4
	(7月20日)	14.0	12.6	1.4
	(8月20日)	15.7	15.2	0.5
生総重(kg/10a)		5429	6467	△ 1038
乾物茎葉重(kg/10a)		757	954	△ 197
乾物雌穂重(kg/10a)		1090	1063	27
乾物総量(kg/10a)		1847	2017	△ 170
同上平年比（%）		92	100	△ 8
推定TDN収量(kg/10a)		1367	1459	△ 92
同上平年比（%）		94	100	△ 6
総体の乾物率（%）		34.0	31.7	2.3
乾雌穂重割合（%）		59.0	52.8	6.2
有効雌穂割合（%）		100	100	0.0

注1）平年値は前7か年中、平成30年（最凶）および令和3年（最豊）を除く5か年の平均。
2）推定ＴＤＮ収量＝乾物茎葉重×0.582＋乾物雌穂重×0.850。
3）乾物収量や割合に関する一部の項目は、小数点以下の四捨五入などの計算方法により、表中の数値をもとに計算しても一致しない場合がある。
4）本年は9月5日に稈長の調査を実施した。

５）大　豆

作　況：良

事　由：　播種は平年並の5月21日に行い、播種後はやや低温で経過したため、出芽期は平年より2日遅い6月7日であった。出芽後は気温が平年より高く経過し、生育が順調に進んだ結果、開花始は平年より10日早い7月7日、成熟期は平年より7日早い9月12日であった。成熟期の主茎長は平年よりも低いが、主茎節数、分枝数および一莢内粒数は平年並であった。着莢数は平年を上回り、百粒重はやや重かったため、子実重は平年比133％であった。屑粒率は平年よりも低く、外観品質は平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

品種名		ユキホマレ		
調査項目		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.21	5.21	0
出芽期	(月.日)	6.07	6.05	2
開花始	(月.日)	7.07	7.17	△ 10
成熟期	(月.日)	9.12	9.19	△ 7
主茎長	(6月20日)	10.4	9.4	1.0
(cm)	(7月20日)	48.0	50.6	△ 2.6
	(8月20日)	50.3	61.3	△ 11.0
	(9月20日)	50.0	63.7	△ 13.7
	(成熟期)	50.0	63.1	△ 13.1
本葉	(6月20日)	1.5	1.2	0.3
数(枚)	(7月20日)	8.0	7.7	0.3
主茎節数	(8月20日)	10.2	10.1	0.1
	(9月20日)	10.1	10.1	0.0
	(成熟期)	10.1	10.0	0.1
分枝数	(7月20日)	5.8	4.9	0.9
(本/株)	(8月20日)	6.0	5.7	0.3
	(9月20日)	5.1	5.3	△ 0.2
	(成熟期)	5.1	5.1	0.0
着莢数	(8月20日)	94.9	82.5	12.4
(個/株)	(9月20日)	87.0	76.7	10.3
	(成熟期)	87.0	77.2	9.8
一莢内粒数		1.88	1.91	△ 0.03
子実重(kg/10a)		490	369	121
同上平年比（%）		133	100	
百粒重（g）		34.0	32.6	1.4
屑粒率（%）		0.4	1.6	△ 1.2
品質（検査等級）		2中	2中	－

注１）平年値は前7か年中、平成30年(最凶)、令和5年(最豊)を除く5か年の平均。

２）8月の着莢数は、莢の長さが2cm以上のものを示す。

３）子実重は水分15％換算。

４）品質(検査等級)は造りによる検査である。

６）小　豆

作　況：良

事　由：播種は平年並の5月21日に行い、播種後は低温で経過したため、出芽期は平年より1日遅い6月11日であった。出芽後は気温が平年より高く経過し、生育が順調に進んだ結果、開花始は平年より7日早い7月16～17日、成熟期は「エリモショウズ」では平年より15日早い9月10日、「きたろまん」では11日早い9月12日であった。いずれの品種も、成熟期の分枝数は平年並であるが、主茎長および主茎節数は平年を大きく上回った。いずれの品種も、百粒重は平年並で、着莢数および一莢内粒数は平年を上回ったため、子実重は「エリモショウズ」では平年比123%、「きたろまん」では平年比134%であった。いずれの品種も外観品質は平年並で、屑粒率は平年よりも低かった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目		エリモショウズ			きたろまん		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期　(月.日)		5.21	5.21	0	5.21	5.21	0
出芽期　(月.日)		6.11	6.10	1	6.11	6.10	1
開花始　(月.日)		7.17	7.24	△ 7	7.16	7.23	△ 7
成熟期　(月.日)		9.10	9.25	△ 15	9.12	9.23	△ 11
主茎長 (cm)	(6月20日)	3.5	3.4	0.1	3.6	3.3	0.3
	(7月20日)	24.3	17.5	6.8	24.0	17.1	6.9
	(8月20日)	91.4	64.5	26.9	117.6	67.8	49.8
	(9月20日)	96.7	71.5	25.2	126.0	76.2	49.8
	(成熟期)	96.7	71.0	25.7	126.0	74.7	51.3
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.6	0.4	0.2	0.6	0.5	0.1
	(7月20日)	9.5	6.4	3.1	9.0	6.2	2.8
主茎節数	(8月20日)	19.6	14.5	5.1	19.6	13.9	5.7
	(9月20日)	18.9	14.9	4.0	19.6	14.2	5.4
	(成熟期)	18.9	14.9	4.0	19.6	14.2	5.4
分枝数 (本/株)	(7月20日)	4.6	2.5	2.1	3.6	2.0	1.6
	(8月20日)	5.3	4.0	1.3	3.8	3.0	0.8
	(9月20日)	4.4	4.3	0.1	3.4	3.2	0.2
	(成熟期)	4.4	4.2	0.2	3.4	3.3	0.1
着莢数 (個/株)	(8月20日)	85.3	45.7	39.6	67.0	42.5	24.5
	(9月20日)	62.7	55.8	6.9	59.0	52.6	6.4
	(成熟期)	62.7	57.8	4.9	59.0	54.5	4.5
一莢内粒数		6.88	6.26	0.62	7.33	6.19	1.14
子実重(kg/10a)		474	386	88	520	388	132
同上平年比（%）		123	100		134	100	
百粒重（g）		14.4	14.6	△ 0.2	17.3	16.5	0.8
屑粒率（%）		4.9	9.1	△ 4.2	4.2	8.0	△ 3.8
品質（検査等級）		４上	４上	－	４上	４上	－

注１）平年値は前7か年中、令和5年(最凶)、令和元年（最豊）を除く5か年の平均。

２）8月の着莢数は、莢の長さが3cm以上のものを示す。

３）子実重は水分15%換算。

４）品質(検査等級)は素俵による検査である。

７）菜　豆

作　況：不良

事　由：播種は平年より1日遅い5月21日に行い、播種後はやや低温で経過したため、出芽期は平年より3日遅い6月7日であった。出芽後は気温が平年より高く経過し、生育が順調に進んだため、開花始は平年より6日早い7月1日、成熟期は平年より12日早い8月16日であった。成熟期の草丈、主茎節数および分枝数は平年並であるが、着莢数および一莢内粒数は平年を下回り、百粒重も軽かったため、子実重は平年比49%であった。生育期の高温による未熟粒（直径7.9㎜のふるいを通過する小粒）、および成熟期前後の降雨による変色粒（色流れ粒）がいずれも多発したため、屑粒率は平年よりも高く、外観品質は平年よりもやや劣った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目		大正金時		
		本年	平年	比較
播種期	（月.日）	5.21	5.21	0
出芽期	（月.日）	6.07	6.04	3
開花始	（月.日）	7.01	7.07	△ 6
成熟期	（月.日）	8.16	8.28	△ 12
草丈（cm）	（6月20日）	9.7	10.8	△ 1.1
	（7月20日）	39.0	39.7	△ 0.7
	（8月20日）	40.3	40.5	△ 0.2
	（成熟期）	40.3	40.4	△ 0.1
本葉数（枚）	（6月20日）	1.7	1.3	0.4
	（7月20日）	3.3	3.8	△ 0.5
主茎節数	（8月20日）	5.3	5.4	△ 0.1
	（成熟期）	5.3	5.4	△ 0.1
分枝数（本/株）	（7月20日）	6.7	5.5	1.2
	（8月20日）	5.2	5.5	△ 0.3
	（成熟期）	5.2	5.6	△ 0.4
着莢数（個/株）	（8月20日）	12.9	21.5	△ 8.6
	（成熟期）	12.9	21.0	△ 8.1
一莢内粒数		2.34	2.79	△ 0.45
子実重(kg/10a)		146	298	△ 152
同上平年比（%）		49	100	△ 51
百粒重（ｇ）		51.7	61.4	△ 9.7
屑粒率（%）		44.5	14.0	30.5
品質（検査等級）		４中	４上	－

注１）平年値は前7か年中、令和4年(最豊)、令和3年(最凶)を除く5か年の平均。

２）子実重は水分15%換算。

３）品質(検査等級)は素俵による検査である。

８）ばれいしょ

作　況：良

事 由：植え付けは平年よりも2日早い、5月9日に行った。浴光催芽期間中の4月下旬～5月上旬にかけて平均気温が低温で経過したため、萌芽期は「男爵薯」が平年並、「コナユタカ」が平年より2日遅かった。萌芽以降、気温が平年より高く推移しており、開花始は平年比で「男爵薯」で2日、「コナユタカ」で5日早かった。6月下旬以降、降水量が極端に少なかったことと高温が影響し茎葉の生育は停滞していたが、7月下旬の降水量が多かったことで生育が進み、両品種ともに茎長は平年よりやや長かった。

「男爵薯」の枯ちょう期は平年よりも7日遅かった。上いも平均重は平年よりも19ｇ軽く、でん粉価も平年より1.3ポイント低かったが、上いも数が平年より多く、上いも重は平年比119%で多収であった。

「コナユタカ」の枯ちょう期は平年よりも10日以上遅く、10月20日時点の枯ちょう度は50%で枯ちょう期に達しなかった。上いも数はやや多く、上いも平均重は平年より19g重く、でん粉価は2.0ポイント高かったことで上いも重は平年比124%、でん粉重は平年比136%で多収であった。枯ちょうが遅れたことに加え9月下旬から10月上旬まで平均気温がやや高く、日照時間もやや多かったことが多収の一因としてあげられるが、全容は不明であった。

以上のことから、「男爵薯」と「コナユタカ」の収量を鑑み、本年の作況は「良」である。

調査項目		男爵薯			コナユタカ		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
植付期	（月.日）	5.09	5.11	△ 2	5.09	5.11	△ 2
萌芽期	（月.日）	5.28	5.28	0	6.01	5.30	2
開花始	（月.日）	6.24	6.26	△ 2	6.26	7.01	△ 5
枯ちょう期	（月.日）	9.06	8.30	7	未達	10.10	－
茎長(cm)	(6月20日)	28	21	7	16	13	3
	(7月20日)	64	55	9	71	80	△ 9
	(8月20日)	70	56	14	124	100	24
茎数(本/株)	(6月20日)	4.4	3.4	1.0	2.2	2.1	0.1
	(7月20日)	5.2	4.6	0.6	2.3	2.7	△ 0.4
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	5831	5305	526	4405	4148	257
	(9月20日)	6449	5435	1014	5526	5764	△ 238
でん粉価(%)	(8月20日)	13.7	15.3	△ 1.6	16.5	19.0	△ 2.5
	(9月20日)	13.5	14.8	△ 1.3	18.0	21.0	△ 3.0
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	-	-	-	942	1136	△ 194
上いも数(個/株)		15.7	11.2	4.5	8.6	7.8	0.8
上いも平均重(g)		92	111	△ 19	210	191	19
上いも重(kg/10a)		6449	5435	1014	8019	6486	1533
同上平年比(%)		119	100	19	124	100	24
でん粉価(%)		13.5	14.8	△ 1.3	23.2	21.2	2.0
でん粉重(kg/10a)		-	-	-	1773	1304	469
同上平年比(%)		-	-	-	136	100	36

注）平年値は前7か年中、平成30年（最凶）、令和3年（最豊）を除く5か年の平均

９）てんさい

作　況：やや良

事　由：移植栽培の播種は、平年より2日早い3月22日に行った。育苗期間後半は平年より気温が低かったため、苗の生育はやや不良であった。移植は平年より4日遅い5月7日に行った。土壌条件は適湿であったため、活着は非常に良好であった。その後、5月中旬の気温が極めて高かったため、草丈、生葉数、茎葉重ともに平年並となった。

直播の播種は、平年より2日遅い5月7日に行った。直播の出芽期は、平年並みの5月15日だった。

5月の中旬は降水量が少なく、5月下旬は気温がやや低かったものの、6月上旬以降は気温が平年並以上で、降水量が十分であったため、すべての項目でほぼ平年となった。

6月下旬から7月上旬にかけては、気温が高く降水量が少なかったため、一時的に生育が抑えられたが、7月中旬の降雨で、特に根部の生育が進んだ。草丈、茎葉重は平年を下回ったものの、葉数、根重、根周は平年を上回っている。

7月下旬から8月中旬は、気温が高く、降水量および日照時間が十分に得られたことから、生育が進み、ほぼ全ての項目で平年を上回った。

8月下旬から9月中旬は、気温が平年並みで、降水量が多かったために生育が進み、草丈、生葉数、生葉重、根重、根周ともに、平年並から平年を上回った。一方、根中糖分は、7月から8月の高温の影響を受けて、平年を下回った。

収穫は、平年並の10月20日に行った。

9月下旬から10月中旬は気温が平年並で、9月下旬に降水量が多かったため、引き続き根部の肥大が進み、根重は平年並から平年を上回った。一方、根中糖分は、7月から8月の高温の影響が残り、平年を下回った。糖量は、移植の「アマホマレ」では平年を下回ったが、移植と直播の「ライエン」では平年を上回った。

以上のことから、本年の作況は「やや良」である。

表　その１

調査項目		移植						直播		
		ライエン			アマホマレ			ライエン		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	3.22	3.24	△ 2	3.22	3.24	△ 2	5.07	5.05	2
移植期	(月.日)	5.07	5.03	4	5.07	5.03	4	－	－	－
出芽期	(月.日)	－	－	－	－	－	－	5.15	5.15	0
収穫期	(月.日)	10.20	10.20	0	10.20	10.20	0	10.20	10.20	0
草丈(cm)	(5月20日)	6.4	6.9	△ 0.5	6.1	7.3	△ 1.2	－	－	－
	(6月20日)	24.0	21.7	2.3	25.2	23.7	1.5	19.6	15.4	4.2
	(7月20日)	47.9	52.4	△ 4.5	53.1	55.1	△ 2.0	45.7	51.4	△ 5.7
	(8月20日)	56.9	57.2	△ 0.3	66.6	62.3	4.3	60.4	58.9	1.5
	(9月20日)	58.4	58.1	0.3	71.0	65.1	5.9	63.8	61.2	2.6
生葉数(枚)	(5月20日)	5.8	6.5	△ 0.7	4.5	5.3	△ 0.8	－	－	－
	(6月20日)	13.4	13.3	0.1	11.4	12.2	△ 0.8	10.9	9.4	1.5
	(7月20日)	23.1	21.8	1.3	21.9	21.4	0.5	22.7	20.4	2.3
	(8月20日)	30.0	27.9	2.1	29.0	26.1	2.9	30.6	25.9	4.7
	(9月20日)	35.4	30.3	5.1	29.0	27.9	1.1	30.5	29.2	1.3

注）平年値は前7か年中、令和3年（最豊）令和5年（最凶）を除く5か年の平均。

表　その２

調査項目		移植						直播		
		ライエン			アマホマレ			ライエン		
		本 年	平 年	比 較	本 年	平 年	比 較	本 年	平 年	比 較
茎葉重 (g/個体)	(5月20日)	1.1	1.3	△ 0.2	1.0	1.3	△ 0.4	－	－	－
	(6月20日)	73	60	13	63	67	△ 4	35	21	14
	(7月20日)	435	506	△ 71	458	571	△ 113	372	436	△ 64
	(8月20日)	808	805	3	970	888	82	791	747	44
	(9月20日)	898	750	148	1066	869	197	893	752	141
根重 (g/個体)	(6月20日)	16	15	1	14	18	△ 4	4	2	1
	(7月20日)	381	252	129	381	257	124	283	164	119
	(8月20日)	854	737	117	827	751	76	744	602	142
	(9月20日)	1177	992	185	1055	1016	39	1033	881	152
根周 (cm)	(7月20日)	26.5	23.0	3.5	25.3	22.7	2.6	23.3	19.8	3.5
	(8月20日)	35.5	34.1	1.4	34.4	32.5	1.9	33.8	31.4	2.4
	(9月20日)	40.3	38.2	2.1	37.1	37.2	△ 0.1	37.3	36.6	0.7
根中糖分（%）	(9月20日)	14.91	16.61	△ 1.70	14.96	16.47	△ 1.51	15.67	16.71	△ 1.04
茎葉重(kg/10a)	(収穫期)	6740	5553	1187	7470	5967	1503	7050	5314	1736
根　重(kg/10a)	(収穫期)	8900	7677	1223	6980	7123	△ 143	7740	6702	1038
同上平年比（%）		116	100	16	98	100	△ 2	115	100	15
根中糖分（%）	(収穫期)	16.72	17.82	△ 1.10	17.32	18.25	△ 0.93	17.37	18.16	△ 0.79
同上平年比（%）		94	100	△ 6	95	100	△ 5	96	100	△ 4
糖量(kg/10a)	(収穫期)	1487	1367	120	1208	1299	△ 91	1344	1213	131
同上平年比（%）		109	100	9	93	100	△ 7	111	100	11

注）平年値は前7か年中、令和3年（最豊）令和5年（最凶）を除く5か年の平均。

10）牧　草（チモシー）

作　況：平年並

事　由：1番草：萌芽期は平年より1日遅い4月17日で、冬損は認められなかった。平均気温は5月中旬および6月上・中旬が高温で推移した。1番草の出穂始および出穂期は、6月9日および6月13日でいずれも平年と同日であった。収穫は平年より1日遅い6月16日に行い、乾物収量は平年比111%と多収であった。

2番草：収穫は平年より1日遅い8月5日に行った。1番草収穫後から2番草収穫まで、平均気温は平年より極めて高く、降水量は7月下旬を除いて少なかったことから生育は停滞した。2番草の乾物収量は平年比41%と少なく、1番草と2番草の合計乾物収量は平年比91%でやや少なかった。

3番草：収穫は平年より3日遅い10月6日に行った。2番草収穫後、平年に比べ平均気温はやや高く、降水量は多く、日照時間は並からやや多かった。再生が順調だったことから、3番草の乾物収量は平年比172%と多収であった。結果、1～3番草の合計乾物収量は平年比103%と平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

品種名		なつちから		
調査項目		本年	平年	比較
萌芽期	（月.日）	4.17	4.16	1
冬損程度		1.0	1.0	0
被度（%）	(5月20日)	100	100	0
	2番草再生時	100	100	0
出穂始	（月.日）	6.09	6.09	0
出穂期	（月.日）	6.13	6.13	0
出穂程度	1番草	7.0	7.0	0
節間伸長程度	2番草	2.0	4.4	△ 2.4
収穫日（月.日）	1番草	6.16	6.15	1
	2番草	8.05	8.04	1
	3番草	10.06	10.03	3
倒伏程度	1番草	1.0	1.1	△ 0.1
病害罹病程度	1番草	1.0	1.0	0.0
	2番草	2.0	2.3	△ 0.3
	3番草	2.0	3.1	△ 1.1
草丈（cm）	(5月20日)	50	43	7
	(6月5日)	79	77	2
	1番草	101	95	6
	2番草再生時	25	38	△ 13
	2番草	39	63	△ 24
	3番草再生時	53	36	17
	3番草	56	40	16
生草収量 (kg/10a)	1番草	2,236	2,362	△ 126
	2番草	384	793	△ 409
	1＋2番草計	2,620	3,155	△ 535
	3番草	804	470	334
	合　計	3,424	3,625	△ 201
乾物率（%）	1番草	26.6	22.6	4.0
	2番草	23.9	29.5	△ 5.6
	3番草	28.9	29.1	△ 0.2
乾物収量 (kg/10a)	1番草	594	533	61
	同上平年比(%)	111	100	11
	2番草	91	225	△ 134
	同上平年比(%)	41	100	△ 59
	1＋2番草計	687	758	△ 71
	同上平年比(%)	91	100	△ 9
	3番草	232	135	97
	同上平年比(%)	172	100	72
	合　計	919	893	26
	同上平年比(%)	103	100	3

注1）平年値は前7か年のうち令和5年（最凶）、令和6年（最豊）を除いた前5か年の平均。
2）冬損程度、倒伏程度および病害罹病程度は1:無または微～9:甚。病害は主に斑点病。
3）出穂程度および節間伸長程度は1:無～9:極多。

付表１　各作物の耕種概要

作物名	一区面積（㎡）	反復	前作物	畦幅（cm）	株間（cm）	一株本数	播種粒数（粒/㎡）	播種量（kg/10a）	株数（株/10a）
1.秋まき小麦	5.4	4	ひまわり	20	ドリル	－	255	－	－
2.春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30	条播	－	340	－	－
3.とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75	17.8	1	－	－	7,491
4.大　　豆	9.6	3	緑肥そば	60	20	2	－	－	8,333
5.小　　豆	9.6	3	緑肥そば	60	20	2	－	－	8,333
6.菜　　豆	9.6	3	緑肥そば	60	20	2	－	－	8,333
7.ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75	30	1	－	－	4,444
8.てんさい	39.6	3	緑肥野生えん麦	60	23.8	1	－	－	7,003
9.牧　　草（チモシー）	2.7	4	緑肥えん麦	30	条播	－	－	2.0	－

付表２　各作物の耕種概要

作物名	施肥量（kg/10a）						備考
	N	P_2O_5	K_2O	MgO	堆肥	その他	
1.秋まき小麦	5.6	17.5	7.0	3.5	－	起生期追肥 N：5.0	
2.春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0	－		
3.とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0	3,000	炭カル：150	
4.大　　豆	1.8	15.0	7.8	3.0	－		
5.小　　豆	4.0	20.0	11.2	4.0	－		
6.菜　　豆	4.0	20.0	11.2	4.0	－		
7.ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0	－		
8.てんさい	15.0	30.0	12.3	6.8	－		
9.牧　　草（チモシー）	15.0	15.0	15.0	3.0	－	（造成時 炭カル：200 ダブリン：30）	2年目草地 年間3回分施

Ⅲ試験研究および地域支援活動の概要

１研究部の概要

１）麦類に関する試験

麦類畑作グループ（麦類）は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。「優良品種決定調査」では秋まき小麦の「北見 102 号」を、春まき小麦では「北見春 88 号」を供試し、両系統を試験継続とした。秋まき小麦「北見 104 号」および「北見 105 号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW11 号」等について適応性を検討した。

二条大麦では、「二条大麦の品種選定試験」により適応性検定試験を行い「札育 12 号」を試験中止、「札育 13 号」を試験継続とし、「札育 14 号」を新配付とした。

２）畑作物に関する試験

麦類畑作グループ（畑作）は豆類やてん菜などの畑作物の新品種育成や品種選定、栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、「畑作物の地域適応性検定試験」として、大豆、小豆および菜豆での有望系統の地域適応性評価を進めている。「地域適応性検定試験」として、小豆では「十育 187 号」、「十育 189 号」を、菜豆では「十育 B87 号」、「十育 E14 号」をそれぞれ供試し、「十育 187 号」を試験中止とした。「系統適応性検定試験」として、大豆では 7 系統を供試し、うち 6 系統を試験中止とした。てん菜では、北海道農業研究センター育成の 3 系統を優決基本相当の「系統適応性検定試験」に供試し、そのうち試験 2 年目の「北海 107 号」を「抽苔耐性検定試験」および「そう根病抵抗性検定試験」に併せて供試した。「北海 107 号」は試験継続、その他 2 系統は試験中止となった。「てん菜輸入品種検定試験」として、民間育成の 9 系統を優決基本相当の「輸入品種生産力検定試験」に供試し、うち試験２年目のホクレン系統「H164」、３年目の北糖系統「HT55」、日甜系統「KWS 3K503」の３系統について「抽苔耐性検定試験」、「そう根病抵抗性検定試験」、および斜里町での「現地検定試験」に併せて供試した。「HT55」および「KWS 3K503」は北海道優良品種に認定された。その他の系統は、4 系統が試験継続、3 系統が試験中止となった。

３）ばれいしょに関する試験

馬鈴しょ牧草グループ（馬鈴しょ）は、でん粉原料用、加工用等の新品種育成を中心に、栽培試験や資材試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は、「馬鈴しょ品種開発事業Ⅲ」において、安定多収な品種の育成を進めている。また、「国内生産力の強化を図るための穀物等品種の開発」では、病虫害複合抵抗性を有するでん粉原料用品種の育成、ホクレンとの共同研究「「トヨシロ」置き換えの馬鈴しょ品種開発強化」では、熟期の早い加工用品種育成の強化に取り組んだ。

育種選抜効率の向上に関する試験は、「早期収穫適性が優れるでん粉原料用馬鈴しょ多収品種の開発促進」において、中期世代の９月上旬収穫による早期肥大性の評価、有望系統の栽培特性および主産地適応性を評価し、収量安定性の高い有望系統開発を強化した。「センチュウ類およびＹウイルス抵抗性馬鈴しょ品種の開発強化と特性検定試験」では育成３年目の系統について、ジャガイモシストセンチュウ、ジャガイモＹウイルス、ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性遺伝子を対象にしたDNAマーカーによる選抜を実施している。

育種選抜における品質の向上に関する試験は、「でん粉原料用馬鈴しょにおける高品質でん粉系統の選抜強化」、「長期貯蔵向けポテトチップ用馬鈴しょ系統の選抜強化」において、でん粉品質並びにチップ加工適性が優れる品種の開発促進を行った。

育種選抜における耐病性の向上に関する試験は、「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」および「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の選抜強化」において、前出の課題と合わせて耐病

虫性（ジャガイモシストセンチュウ、ジャガイモシロシストセンチュウ、そうか病、疫病、Ｙウイルス病）に優れる品種の開発促進を進めているとともに、特性検定試験を実施している。

「優良品種決定調査」では、加工用４系統およびでん粉原料用１系統について検討した。加工用の「北育 33 号」は複合病虫害抵抗性を保持し、低温貯蔵後のチップカラーが優れることから、優良品種認定された。加工用の「北育 34 号」は耐病性および加工適性が優れることから次年度も品種化に向けた試験を継続する。加工用の「北育 36 号」および「北育 37 号」は低でん粉価により試験中止とした。でん粉原料用の「北育 35 号」は、耐病性および収量性に優れることから次年度も品種化に向けた試験を継続する。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、民間育成３系統「CP20」、「HP08」及び「HP09」について生産力検定並びに病害虫抵抗性検定を行った。「CP20」は褐色心腐れの発生が多いこと、「HP08」はＹモザイク病の病徴が見えにくいこと「HP09」については、熟期が遅く粗皮であることから、試験中止とした。

品種特性の解明に関する試験では、「生食用馬鈴しょ「ゆめいころ」の普及促進に向けた生育特性および食味の評価」において「ゆめいころ」の農業特性と気象の関連解析を行うとともに、訓子府町の飲食店に「ゆめいころ」の調理加工の評価を依頼した。

また、「ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性馬鈴しょ品種「ユーロビバ」の農業特性解明」では、「ユーロビバ」の基本的農業特性ならびにでん粉品質の調査を行い、指導参考事項として成績をとりまとめた。

４）牧草・飼料作物に関する試験

馬鈴しょ牧草グループ（牧草）では、チモシー新品種育成試験を中心に、牧草・飼料作物の地域適応性評価、栽培試験および資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業Ⅲ」では、収量性、競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。また、ホクレンとの共同研究「飼料品質の向上に寄与するチモシー新品種の開発促進」および（一社）日本草地畜産種子協会との共同研究「道内の多様な環境に適応するチモシー品種の開発」では、早生育成２系統「北見 38 号」「北見 39 号」について地域適応性検定試験および特性検定試験を実施した。また、「国内飼料生産力強化のための飼料作物品種の開発」では、初期生育性、耐暑性が既存品種より優れるチモシーの有望系統育成のための試験を行った。

民間受託試験「飼料作物品種比較試験」では、牧草２草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施した

５）栽培環境に関する試験

生産技術グループ(栽培環境)は、土壌肥料(資材試験を含む)および環境保全に関する研究を実施している。本年度は、「養分収支と肥料価格を考慮した春まき小麦に対するリン酸施肥指針」、「養分収支と肥料価格を考慮した直播てんさいに対するリン酸施肥指針」、「養分収支と肥料価格を考慮したたまねぎに対するリン酸施肥指針」および「秋まき小麦に対するプラスチックを用いない肥効調節型肥料の施用効果」として４課題を取りまとめ、北海道農業試験会議（成績会議）に提出し、指導参考事項となった。また、「国内向け BNI 強化小麦の開発の加速化」を終了課題とした。

継続課題として、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試と共同)、「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」(同上)、「国内資源の肥料利用拡大に向けた調査委託事業(地力調査)」(同上)、「農作物病害虫診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壌調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試、花野菜セと共同)を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第４期）3）栽培改善による生産および品質の安定化(1)春まき小麦新品種候補系統「HW10 号」および秋まき小麦菓子用品種「北見 95 号」の高品質安定栽培技術の確立」、「同上、2)地域の生産および品質安定に向けた障害･病害抵抗性と収量性の選抜強化（5）葉面温度の活用と安定性を考慮した収量性の選抜強化②収量性安定の評価と解析」、「土壌タイプ、砕土整地および播種機の違いが直播てんさいの出芽に与える影響調査」、「ジャガイモシス

トセンチュウ類封じ込めのための捕獲作物利用技術の確立と実用化」（捕獲作物の低コスト栽培技術の確立、北農研と共同）、「革新的技術導入による地域支援－オホーツク地域におけるでん粉原料用ばれいしょ「コナヒメ」の高位安定生産のための疎植栽培の現地実証－」である。

６）病害虫に関する試験

生産技術グループ（病虫）は、畑作物および園芸作物の病害虫防除対策試験、馬鈴しょのそうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウの抵抗性評価、農作物病害虫診断試験、新農業資材実用化試験（新農薬効果査定試験）および病害虫発生予察事業を実施している。

本年度は、「ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性ばれいしょ地域在来品種等「ユーロビバ」の特性」（馬鈴しょ牧草 G、中央農試と共同）として取りまとめ、北海道農業試験会議（成績会議）に提出して、指導参考事項となった。

継続課題として、「病害虫発生予察調査」（中央農試、道南農試、上川農試、十勝農試、花野菜セと共同）、「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」（そうか病抵抗性検定、馬鈴しょ牧草 G と共同）、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」（そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定、馬鈴しょ牧草 G、中央農試、上川農試、十勝農試、北農研と共同）、「センチュウ類およびＹウイルス抵抗性馬鈴しょ品種の開発強化と特性検定試験」（ジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定、馬鈴しょ牧草 G、中央農試と共同）、「北海道の小豆におけるマメノメイガ緊急防除対策」（道南農試、中央農試と共同）を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「農作物病害虫・生理障害診断および緊急対策試験」（中央農試、道南農試、上川農試、十勝農試、花野菜セと共同）、「タマネギの重要病害虫防除における減農薬・省力化技術の開発」、「多発及び耐性菌に対応したテンサイ褐斑病の省力的防除技術の開発」（中央農試、十勝農試と共同）、「化学合成農薬の種子処理に依存しない秋まき小麦の紅色雪腐病防除技術の開発」（中央農試と共同）、「馬鈴しょ疫病抵抗性系統の効率的な選抜と開発強化」（疫病菌の接種および DNA マーカー検定による実生個体選抜、塊茎腐敗抵抗性検定、馬鈴しょ牧草 G、中央農試と共同）、「ジャガイモシストセンチュウ類封じ込めのための捕獲作物利用技術の確立と実用化」（捕獲作物の低コスト栽培技術の確立、北農研と共同）である。

７）地域支援活動

オホーツク地域農業技術支援会議では、技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議３回（普及センター本所および Web 開催）、五者会議（Web 開催）および地域関係者会議（網走総合振興局で Web 開催と対面のハイブリット開催）を開催し、地域ニーズ（本年度ニーズ１課題、過年度ニーズ３課題）の現地の聞き取り調査や対応・ニーズ元への回答等を行った。

プロジェクト課題は、令和５年度から「大豆間作小麦栽培の対応」について取り組み、４月に越冬後調査と病害調査を行った。７月に収量調査を行い、ニーズ元に対し中間結果報告、１月に最終結果報告を行った。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

２技術普及室の活動

１）専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

耕種（水稲・畑作・園芸）については、稲作部会研修にかかる支援、畑作部会研修にかかる支援、園芸部会研修にかかる支援を行った。また、オホーツク管内有機農業ネットワークが開催する有機農業セミナーで、道総研の有機農業技術の成果について報告した。

畜産については、畜産部会研修にかかる支援として、搾乳牛の乾乳期の栄養管理について、担当普及室へ要請し研修対応を行った。また、管内ＴＭＲセンター連絡会の構成メンバーとして、組織の活性化に貢献した。

植物保護については、センキュウほ場におけるハダニ類の防除対策の構築と有効性の検証について、だいこんのヒメダイコンバエの防除に関する試験ほの設置方法と評価方法について（釧路中西部支所）、ノメイガ類実態調査に

関する助言及び支援（十勝畑作部会）など関連する情報提供を行った。

土壌肥料については、でん粉原料用馬鈴しょ「コナヒメ」安定栽培法の検討と、てんさい直播栽培におけるは種機及び、土壌タイプに応じた砕土・は種方法の検討ついて支援した。

人材育成については、採用３年目までの新任普及職員に対する研修支援を行った。

２）調査研究の実施

調査研究は次の３課題である。

１つ目は、でん粉原料用ばれいしょ「コナヒメ」の安定生産技術の検討である。

オホーツク管内ではでん粉原料用ばれいしょが多く栽培されている。ジャガイモシストセンチュウ対策として従来の「コナフブキ」からジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種「コナヒメ」に置き換わりが進んでいるが、栽培技術が定着しておらず、反収が伸び悩んでいる。そのような状況の中、令和６年指導参考事項『でん粉原料用ばれいしょ「コナヒメ」の安定生産のための栽培法』では、十勝地域における疎植栽培の増収効果が示されている。

オホーツク地域でも疎植栽培による増収が望めるのか検証を行うため、小清水町と斜里町にそれぞれ１ほ場、試験展示ほを設置した。

疎植区におけるでん粉収量は、小清水では慣行比 103%とやや多かったが、斜里では同比 97%とやや少なかった。ほ場ごとにみると、小清水と比較して斜里の上いも個数は約３～５個/株、上いも重は約 1,700～2,000kg/10a 少なく、でん粉価は約 0.6 ポイント低かった。このためでん粉収量は 578～600kg/10a と低かった。斜里において疎植の効果が見られなかった原因として、半身萎ちょう病が疑われる早期枯凋がみられ、塊茎の着生数やでん粉の蓄積に影響した可能性が考えられた。

２つ目は、「営農支援ツールの活用実態と今後の方向」である。

スマート農業技術のうち、営農支援ツールの導入を行う農業者が増えているが、導入された戸数や種類等の実態を一元的に把握することは難しい。今後、営農支援ツールについて農業者に情報提供することを想定し、営農支援ツールに関する知識と活用事例について調査した。

令和５年度食料・農林水産業・農山漁村に関する意識・意向調査、農業支援サービスに関する意識・意向調査結果（農業者 10,351 人）によると、有償サービスを利用している割合が 26.9%で、利用している有償サービスのうち、営農支援ツールが含まれる「データ分析型」の利用は 31.1%であった。有償サービスを利用していない理由については、「必要性を感じなかったから」と回答した割合が 29.3%と最も高く、次いで「そもそも農業支援サービスについて具体的に調べていない」が 29.2%であった。

農水省ＨＰ、令和６年度全国農業システム化研究会資料を参照し、28 種類の営農支援ツールについて調査した。ＩＣＴ、ＡＩなどを利用して農業生産に関するデータを可視化し、栽培管理や経営の効率化・合理化を推進できる。スマート農業の推進に欠かせない技術として、農業機械メーカーなどが開発し、農業者へ提供を行っている。作業計画や実績を記録したり、記録した情報をもとに、生産コストの見える化や栽培計画・方法の改善、収量予測等に活用する。機能を絞った安価な製品から、経営最適化に向けた分析機能等が充実した製品まで幅広く存在する。

営農支援ツールのひとつ、「アグリノート」導入農業者に活用事例を聞き取り調査した。導入費用は個人経営では 11,000 円/年（ほ場登録数 100 まで）、法人では 33,000 円/年（ほ場登録数上限なし）のコースを利用している。「アグリノート」は営農日誌のような機能をもち、タブレットやスマホで労働時間と時給の管理、防除や施肥等の作業の記録、機械の稼働記録、作業予定の管理を行っている。導入後の効果として、防除のタイミングが的確につかめ、前回や去年の防除時期・薬剤がすぐわかることや、写真を記録しておけば、営農日誌的に昨年の同じ時期の生育をみることができることである。今後は適期刈取への活用が期待される。作業日誌がペーパーレス化した効果は大きく、データをエクセル形式でパソコンに保存することもできる。

今後、営農支援ツールの導入意向のある農業者に対し、情報提供することに活用する。

３つ目は、「畑作ほ場における難防除雑草種

の実態把握」である。

〇課題の背景

特にてんさいほ場において､既存の雑草防除体系では抑制できず増加している雑草種が確認され、地域一円で急速に拡大している。

問題となっている雑草種について、雑草の研究部門のある東北農研浅井氏の協力を得て、イガホビユではとの回答が示された。

過去の研究成果から、畑作物でイガホビユに効果のある除草剤について北見農試から情報提供したが、既に現地ほ場では効果が低いことを JA は確認しており、対応策の早期確立が求められている。

〇実態把握調査

状況把握のため、現地実態調査を３地区３ほ場で実施（５月下旬～９月上旬）した。

９/11 に支援会議体（振興局、ＪＡ、普及センター本所、清里支所、北見農試）で現地を調査し、問題となっているヒユ科雑草はアオゲイトウ、ホソアオゲイトウ、イガホビユが混発していることを確認した。

現地では６月中旬以降にほ場内にヒユ科雑草が出現した。移植栽培では、ヒユ科雑草はてんさいの株元から生えている個体が多く、９月におこなった残草調査でも同様の傾向だった。直播栽培では、生育が遅いため、畦間の中央付近からも出現していた。

草丈が 10cm 以上になると除草剤では枯殺しきれていなかったことから、雑草生育初期に除草剤散布することが重要と思われた。

９月の残草調査では、３ほ場共に比較的雑草は少なく、既存の除草体系でもある程度の除草効果が見られたことを確認した。

〇結果の考察と今後の対策について

JA との意見交換で、ヒユ科雑草が増えたのは、近年の高温傾向により雑草種が多様化したこと、また、輪作作物（ばれいしょ、てんさい）において､優先雑草種に対して効果的なタイミングで除草剤散布ができない事例があったために増えてしまったと考えられた。

普及センターが実施した室内での除草剤試験結果や現地実態調査の結果から、雑草種に応じた効果的な除草剤が使える輪作作物（大豆やにんじん）の導入や、てんさいでは茎葉処理剤の他、土壌処理剤を効果的に使えるような除草体系を検討する必要がある。

除草体系については研究と情報共有していきながら関係機関（ホクレン、JA、普及センター）と協議していく。

３）地域農業技術支援会議の活動

オホーツク地域農業支援会議では､技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議３回・臨時五者会議・五者会議および地域関係者会議を開催し、４課題（研究課題１、普及課題１、プロジェクト課題１、地域対応課題１）について試験展示ほ設置と調査、ニーズ元との取組成果の共有を行った。また、各関係機関・関係団体にニーズ調査を行い、１課題についてニーズ元に聞き取り調査と回答等を行った。

プロジェクト課題は、令和５年度から「大豆間作小麦栽培の対応」について取り組み、４月に越冬後調査と病害調査を行った。７月に収量調査を行い、ニーズ元に対し中間結果報告、１月に最終結果報告を行った。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

４）農業試験場における普及指導員の研修実施

高度専門技術研修（植物保護）は６月上旬に集合形式で、また高度専門技術研修（畑作）は６月中旬に web による講師対応にて開催した。

Ⅳ　研究発表および普及事項

１　研究発表

１）研究論文

○Shizen Ohnishi, Kentaro Horikawa, Naoya Yamaguchi, Chihiro Souma, Yumi Sato, Koichi Morita, Tatsuya Sonoda. Novel allele derived from a Japanese landrace wheat ‘Asakazekomugi’ for Fusarium head blight resistance without yield penalty and thousand grain weight reduction. Breeding Science オンライン掲載(2026).

○Keiko Kizawa, Tatsuya Sonoda, Shizen Ohnishi, Katsuyuki Hayakawa. Structural analysis of wheat glutenins by diagonal electrophoresis for disulfide bond detection. Cereal Science 121:104088 (2025)

○中川浩輔・堀内優貴・佐藤博一・長澤秀高・奥山昌隆・佐藤仁・萩原誠司・山口直矢・齋藤優介. インゲンマメ新品種「舞てぼう」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 110:19-29(2026).

○飯田憲司・足利和紀・藤井弘毅・田中常喜・高畠聡史・佐藤公一・岩渕慶・安達美江子・竹村紘・竹田芳彦・奥村正敏・白川結美子. チモシー新品種「ゆめみるひ」の育成. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 110:31-45(2026).

○下間悠士. リンゴ展葉期から開花期におけるクロルピリホス水和剤の代替殺虫剤によるハマキムシ類および他害虫に対する防除効果. 北日本病害虫研究会報 76:135-139(2025).

○森万菜実・西脇由恵. *Alternaria brassicae* によるブロッコリー黒すす病の発生（病原追加）. 北日本病害虫研究会報 76:28-31(2025).

○Manami Mori・Ayumi Notsu・Toyozo Sato・Naoki Fujihara・Tomoo Misawa. Stem and root rot of *Atractylodes lancea* caused by *Rhizoctonia* spp., including a new subgroup of AG-6 (AG-6 Gv5) and virulence of Japanese AG-6 isolates. Journal of General Plant Pathology 92:32-42(2025).

２）口頭発表

○其田達也他 21 名.北海道初の菓子用コムギ品種「北見 95 号」の育成.日本育種学会第 149 回講演会 (2026.3.21).

○斉藤涼介・相馬ちひろ・阿出川さとみ・白澤健太・大西志全.日本育種学会第 149 回講演会 (2026.3.21).

○池谷聡・田澤暁子・池谷美奈子. テンサイ褐斑病の被害解析. てん菜研究会大 23 回技術研究発表会（2025.7.16)

○佐藤圭・石川圭大・和﨑俊文・足利奈奈・白澤健太・品田博史・山口直也.ゲノミックセレクションはバレイショ育種に使えるのか？日本育種学会第 149 回講演会 (2026.3.21-22)

○三和優吾・笛木伸彦. 春まき小麦現行品種「春よ恋」と過去品種「北海 178 号」のリン酸施肥反応の品種間差－現在の試験データおよび北見農試所蔵の戦時中データの比較検討－. 日本土壌肥料学会 2024 年度新潟大会講演要旨集 p99(2025).

○三和優吾・笛木伸彦. 土壌溶液中のリン濃度と有効態リン含量の解析(予報). 日本土壌肥料学会北海道支部 2025 年度秋季支部大会 (2025.12) .

○下間悠士・森万菜実. たまねぎのネギアザミウマに対する育苗箱灌注を用いた省力的防除方法. 第 79 回北日本病害虫研究発表会 (2026.2).

○森万菜実・下間悠士. 静電ノズルを使用したたまねぎのネギアザミウマ防除の散布水量の削減. 第 79 回北日本病害虫研究発表会 (2026.2).

○森万菜実・野津あゆみ・三澤知央. *Rhizoctonia solani* AG-2-2 IV によるセンキュウ立枯病(新称). 令和８年度日本植物病理学会大会(2026.3).

３）専門雑誌記事

○大西志全．縞萎縮病抵抗性の期待の新品種「きたほなみ R」．あぐりぽーと 57 号（2025）.
○大西志全．北海道期待の新品種「きたほなみ R」．米麦改良 11 月号（2025）.
○大西志全．コムギ縞萎縮病抵抗性の小麦新品種「きたほなみ R」．あぐりさろん 21　12 月号（2025）.
○雨森大.てんさい新品種「ハニー」(系統名：HT55).北農 93-2,49-50(2026).
○雨森大.てんさい新品種「カーベ 3K503K」(系統名：KWS 3K503).北農 93-2, 51-52(2026).
○池谷聡.令和 7 年産てん菜の生産実績とその要因について.てん菜だより 15, 2-5(2026).
○高畠聡史・飯田憲司・鈴木美玲．とうもろこし（サイレージ用）新品種「LG31295」　北農第 92 巻 2 号:43-44(2025).
○高畠聡史・今啓人．【新品種】飼料用トウモロコシ「SL19017」「LG31295」　デーリィマン　3 月号:68-71(2026).
○品田博史．貯蔵後も「男爵薯」に近い味わいで芽が出にくい ～生食用ばれいしょ　「ゆめいころ」の食味特性と貯蔵適性～ニューカントリー6 月号　23-25(2025).
○石川圭大．ばれいしょ新品種「北育 33 号」　北農第 93 巻 2 号:61-62(2026)
○石川圭大．技術特集　馬鈴しょ新品種「北育 33 号」　ニューカントリー4 月号:20-22(2026)

４）著編書、資料

○小澤徹・小倉玲奈・森万菜実・下間悠士．北海道病害虫防除提要　第 8 版．北海道植物防疫協会：943pp（2026）

５）新聞記事

○村山慎也．秋播き小麦新品種「きたほなみ R」．農業共済新聞(2025.6.18)
○雨森大．糖分が高く４つの病害に強い！てんさい新品種「HT55」．十勝毎日新聞「農業新技術・十勝農業記事ハイライト 2026.
○雨森大．褐斑病“極強”で高糖分！てんさい新品種「KWS 3K503」．十勝毎日新聞「農業新技術・十勝農業記事ハイライト 2026.
○品田博史．貯蔵後も「男爵薯」に近い味わいで芽が出にくい ～生食用ばれいしょ　「ゆめいころ」の食味特性と貯蔵適性～．農業共済新聞（2025.7.23）
○石川圭大．病虫害に強くポテトチップスがきれいに揚がる！ばれいしょ新品種「北育 33 号」　十勝毎日新聞「農業新技術・十勝農業記事ハイライト 2026.

２　普及事項

１）普及奨励事項

（１）小麦新品種「春紬」（HW10 号）
（２）てんさい新品種「HT55」
（３）てんさい新品種「KWS 3K503」
（４）シロクローバ新品種「AberSwan」
（５）とうもろこし（サイレージ用）新品種「KWS ジュリオ」（HK2103）
（６）ばれいしょ新品種「北育 33 号」

２）普及推進事項

（１）オーチャードグラス新品種「イコロ」（北海 36 号）

３）指導参考事項

（１）ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性ばれいしょ地域在来品種等「ユーロビバ」の特性
（２）ばれいしょ地域在来品種等「ＣＰ１４」の特性
（３）ばれいしょ地域在来品種等「ＣＰ１５」の特性
（４）「養分収支と肥料価格を考慮した春まき小麦に対するリン酸施肥指針」
（５）「養分収支と肥料価格を考慮したたまねぎに対するリン酸施肥指針」
（６）「養分収支と肥料価格を考慮した直播てんさいに対するリン酸施肥指針」
（７）「秋まき小麦に対するプラスチックを用いない肥効調節型肥料の施用効果」
（８）生育調節剤
(10) 殺虫・殺菌剤
①たまねぎの小菌核病に対するキノフメリン水和剤Ｆの効果
②せんきゅうのハダニ類に対するクロルフェナピル水和剤Ｆの効果
③せんきゅうのハダニ類に対するミルベメクチン乳剤（未登録）の効果
④だいこんのヒメダイコンバエに対するダイアジノン粒剤（５％）
（未登録、処理法変更：土壌表面散布）の効果
⑤にんじんのキタネグサレセンチュウに対するイミシアホス液剤の効果
⑥キャベツのヒメダイコンバエに対するクロラントラニリプロール･ジノテフラン水和剤ＤＦ（未登録）の効果

４）研究参考事項
なし

３　品種登録・特許申請

Ⅴ　研究企画・場運営・広報活動

1　諸会議

会　議　名	開催時期	場　所	参　加　者
定例庁内会議	R7.4.16	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.5.16	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.6.9	農試講堂	場員
新規課題場内検討会	R7.6.17	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.7.2	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.8.8	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.9.3	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.10.1	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.11.10	農試講堂	場員
定例庁内会議	R7.12.10	農試講堂	場員
現地委託試験成績検討会	R7.11.27	訓子府町公民館講堂(web 併用)	場員、普及センター、関係農試、関係農業団体
成績会議場内検討会	R7.12.9	農試講堂	場員
定例庁内会議	R8.1.7	農試講堂	場員
設計会議場内検討会	R8.2.6,10	農試講堂	場員
定例庁内会議	R8.2.3	農試講堂	場員
定例庁内会議	R8.3.12	農試講堂	場員
現地委託試験設計検討会	R8.3	書面開催	場員、普及センター、関係農試、関係農業団体等

2　各種委員会

1）ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委 員 長：平井剛

事務局長：池谷聡(ほ場管理)、古屋幸生(施設等整備)

委　　員：其田達也、中川浩輔、伊藤幸雄、品田博史、飯田憲司、板垣英祐、小倉玲奈、菅原彰、門なつみ

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第１回：令和７年６月 11 日

1)場内持ち込みサンプルについて

2)ジャガイモシストセンチュウの場内土壌検診

3)防風林整備関係

4)契約職員の場内移動にかかる動線の問題について

5)Ｅほ場に入る場合の通行の問題について

6)南８線の洗車場について

7)ほ場の暗渠更新について

その他）スプレイヤーの南８線の洗車場での水の補給について

第２回：令和８年１月 14 日

1)令和８年度試験研究用備品（競争枠・通常枠）要望に係る順位付けについて
2)固定圃（Ｅ）ほ場洗車場について
3)赤カビ病検定ほ場の区画変更について
4)令和８年４月からの防疫区域について

第３回：令和８年３月 26 日
1)防疫区域の運用について
2)固定ほ場への出入りについて

２）業務委員会

(1) 構成
委 員 長：池谷聡
委　　員：伊藤幸雄、斉藤涼介、中川浩輔、石川圭大、高畠聡史、三和優吾、下間悠士

(2) 活動内容
① 第１回委員会：令和７年４月 11 日
1)業務委員会体制
2)業務委員会開催要領
3)麦類畑作Ｇ（管理）業務体制
4)室外契約職員体制
5)室外契約職員のけが等の災害対応
6)週間作業予定
7)月間作業予定
8)室外契約職員作業日誌対応
9)機械契約職員対応
10)勤務時間外における作業の休止、一時的な休息について（室外契約職員）
11)作付計画
12)雑草防除
13)堆肥散布
14)今後の４月予定
② 定例委員会：4 月 17 日から 10 月 31 日まで原則として毎週木曜日に開催した。
1)機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
2)室外契約職員週間作業計画

３）図書・広報委員会

(1) 構成
委 員 長：井上哲也
委　　員：井上顕伸、中川浩輔（図書連絡委員兼務）、品田博史、小澤徹

(2) 活動内容
① 第 1 回委員会:令和 7 年 8 月 29 日
1)図書連絡委員の選任
2)令和 7 年度定期刊行物購入計画の確認
3)今年度業務内容の確認
4)その他（資料保管庫の割り当て，「ルーラル電子図書館」の利用について）
② 第 2 回委員会：令和 8 年 3 月 9 日

1)令和 8 年度定期刊行物購入計画の策定
2)新庁舎図書引越について
③ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施
④新庁舎移転に伴う、図書の梱包および荷ほどき

4）システム委員会

(1) 構成
委 員 長：唐星児
委　　員：林和希、雨森大、鈴木美玲、木場稔信

(2) 活動内容
① 第 1 回委員会：令和 6 年 5 月 22 日
1)情報システム管理者の選任
2)北見農試内システム関係の業務分担
3)道総研ホームページ更新操作マニュアルについて

5）バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成
委 員 長：井上哲也
委　　員：村山真也、小倉玲奈、門なつみ、井上哲也（兼任）

(2) 活動内容
① 第 1 回委員会:令和 7 年 6 月 3 日
1)本年度の委員確認
2)令和 6 年度報告
3)令和 7 年度活動計画
4)新庁舎への移転について
②新庁舎への移転に伴う備品・実験器具等の整理、引っ越し対応などは随時実施

6）定期作況報告委員会

(1) 構成
委 員 長：平井剛
事務局長：大西志全
気象担当：大西志全
とりまとめ：斉藤涼介
委　　員：村山真也、斉藤涼介、雨森大、中川浩輔、和崎俊文、高畠聡史、鈴木美玲

(2) 活動内容
① 第 1 回委員会:令和 7 年 4 月 9 日
1)定期作況調査報告実施体制
2)年間日程
3)報告様式
4)作況の判定基準設定
5)作況調査報告実施要領の確認、北見農試定期作況における気象経過
6)テンサイの供試品種の変更

7）公開デー実行委員会

(1) 構成

委 員 長：平井剛

事 務 局：古屋幸生、井上哲也

委　　員：林和希、中川浩輔、柴田匠、佐藤圭、高畠聡史、森万菜実、板垣英祐、菅原彰、門なつみ

(2) 活動内容

① 第1回委員会:令和6年8月1日

COOP「食べる・たいせつフェスティバル2025」への出展内容について論議。①出展内容については、出展は小麦を中心とした、子ども向けのパネル展示とクイズを実施する。②対応者については、別途事務局から委員を中心に相談した上で決定。

② 第2回委員会:令和8年2月27日

令和8年度に公開デーを再開するか、引き続き代替イベントへ参加するかについて協議。①令和8年は旧庁舎の解体工事が予定されていることなどから公開デーは実施しないこととし、COOP「食べる・たいせつフェスティバル2026」へ出展する。②出展内容については生産技術Gを中心に作物担当Gが協力し、次年度実行委員会で協議する。③お土産については必須とせず、馬鈴しょ牧草Gで「ゆめいころ」を栽培し、可能であれば配布を行う。④令和9年度には公開デーを再開する。

③ 3月11日に食べる・たいせつフェスティバル運営事務局より、2026年度のイベント内容が変更される旨の連絡を受けたことから、令和8年の代替イベントについては、「食べる・たいせつフェスティバル2026」の内容を確認した上で決定することとした。

8）オホーツク農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委 員 長：唐星児

事 務 局：古屋幸生、大西志全、池谷聡、井上哲也

実行委員：中川浩輔、飯田憲司、菅原彰、壽永七月男、斉藤涼介

(2) 活動内容

① 第1回実行委員会：令和7年9月16日

1)実行委員会体制確認、開催概要案検討、準備内容確認

② 第2回実行委員会：令和7年12月23日

1)セミナー開催概要および実行委員会体制確認、準備経過報告

2)セミナー開催時間決定、準備の責任者・担当者決定、作業内容・スケジュール確認

3)口頭発表・ポスター発表課題の検討

4)当日プログラムの検討

③ 第3回実行委員会：令和8年1月15日

1)口頭発表課題・ポスター発表課題決定

2)当日プログラムの決定

3)準備内容・スケジュール詳細確認

4)会場との打合せ事項確認

9）安全衛生委員会

(1) 構成

委　　員：鈴木孝子、平井剛、古屋幸生、壽永七月男、池谷聡、菅原彰、三和優吾、大西志全、唐星児、荒川雅美

オブザーバー：中村浩、井上哲也、門なつみ

(2) 活動内容

令和７年４月 16 日：組織体制検討

令和７年５月 16 日：職場巡回（麦類畑作Ｇ（畑作））

令和７年６月９日：意見交換（業務車事故及び化学物質の取扱について）

令和７年７月２日：職場巡回（麦類畑作Ｇ（麦類））

令和７年８月８日：意見交換（夏の農作業安全・契約職員の高温時の対応について）

令和７年９月３日：職場巡回（生産技術Ｇ）

令和７年 10 月１日：意見交換

（秋の農作業安・契約職員の高温時の対応・労働災害事故の手順書について）

令和７年 11 月 10 日：職場巡回（馬鈴しょ牧草Ｇ）

令和７年 12 月 10 日：意見交換（業務車事故について）

令和８年１月７日：職場巡回（総務課）

令和８年２月３日：意見交換（春作業で留意すべきこと、ストレスチェック結果の対応策）

令和８年３月 12 日：総括、消防計画（案）について

３　刊行印刷物

印　刷　物　名	発行年月	頁	部数

１　広報活動

１）シンポジウム・セミナー等

名　称	開催日	場　所	内　　容	参加者
オホーツク農業新技術セミナー	R8.2.25	北見市端野町公民館	講演８題、パネル展示 17 枚の展示が行われた	159 名

２）マスコミ、広報誌等による報道

タ　イ　ト　ル	報　道　機　関	掲載･放送日

３）展示会等への出展、公開デー

(1) 北見農試公開デー2025

庁舎新築準備のため開催を休止した。

(2) COOP「食べる・たいせつフェスティバル 2025」出展

北見農試公開デー2025 休止の代替として、９月 27 日（土）開催の同フェスティバルに出展した。

会場：サンドーム北見＆サンライフ北見

展示：小麦（「きたほなみ R」、「北見 95 号」）、病害虫（「R6 年度に新発生した病害虫」、「R7 年に特に注意を要する病害虫」）のパネル展示、これら内容に関する農業クイズ、クイズ景品としてのお土

産により、試験場業務についてＰＲ活動を行った。

５　見学受入れ

年月日	団　　体　　名	人 数
4 月 24 日	国立順天大学校	3
6 月 19 日	ホクレン北見支所	8
6 月 23 日	北海道農産協会	4
6 月 24 日	川西農民連盟	14
6 月 25 日	訓子府中学校	7
6 月 26 日	十勝農業協同組合連合会	16
6 月 27 日	北見市甜菜耕作組合	10
7 月 1 日	JA びえい　豆採種生産部会	20
7 月 3 日	東京農業大学	7
7 月 3 日	味の素食品北海道	2
7 月 4 日	北海道大学作物学研究室	4
7 月 4 日	デリア食品株式会社	5
7 月 7 日	カガミ菓子店	2
7 月 16 日	居武士小学校	8
7 月 16 日	訓子府畑作専門部会	25
7 月 23 日	デリア食品株式会社札幌支店	5
8 月 6 日	日甜美幌製糖所	18
8 月 7 日	松谷化学工業株式会社	2
8 月 19 日	東京農工大学農学部応用生物科学科	4
8 月 21 日	日本豆類協会	3
9 月 4 日	茨城県農業総合センター　山間地帯特産指導所	1
9 月 18 日	ホクレン農業共同組合連合会	3
10 月 14 日	デリア食品株式会社	9
10 月 16 日	三幸食品株式会社	1
10 月 22 日	デリア食品株式会社	3
12 月 5 日	JA 清里町	11
12 月 3 日	美瑛町加工馬鈴薯コントラ協議会	18

Ⅵ　技術指導および研修

1　研修生の受入れ

研　修　項　目	団 体・人数	研修期間	対応ｸﾞﾙｰﾌﾟ
令和７年度普及指導員指導力養成研修（高度専門研修・植物保護）	網走農業改良普及センター本所（１名）、網走農業改良普及センター清里支所（１名）	R7.6.2～6.5	技術普及室、生産技術Ｇ
令和７年度普及指導員指導力養成研修（高度専門研修・畑作	網走農業改良普及センター（１名）、網走農業改良普及センター網走支所（２名）	R7.6.12～6.13	技術普及室、麦類畑作Ｇ、馬鈴しょ牧草Ｇ、生産技術Ｇ

2　講師派遣

研修会および講習会	主　催　者	開催日	演　　題	派遣者
令和７年度北見施肥防除合理化推進連絡会議総会（研修会）	北見施肥防除合理化推進連絡協議会	R7.4.18	最新の研究成果の紹介	板垣英祐 森万菜実
令和７年度普及指導員新任者早期養成研修（新任者研修Ⅰ）	北海道農政部	R7.5.19	スマート農業の概要	千川明子
令和７年度普及指導員新任者早期養成研修（新任者研修Ⅰ）	北海道農政部	R7.5.20	畑作の基礎技術	中村浩
令和７年度普及指導力養成研修（高度専門研修・植物保護・前期）	北海道農政部	R7.6.2～5	病害虫診断に係る高度な診断・同定手法の習得	飯田麻衣
農業経営者育成研修・農業経営分析コース１期	農業大学校	R7.6.3	経営分析の基礎	千川明子
令和７年度普及指導員指導力養成研修（高度専門研修・畑作・前期）	北海道農政部	R7.6.12～13	てんさいの品種動向と栽培法	池谷聡
			肥料価格高騰に対応した施肥管理	唐星児
			畑作の現状と課題､研修生事例に基づく研究検討	中村浩
岩見沢市農村連絡協議会	岩見沢市農村連絡協議会	R7.6.30	きたほなみＲの品種特性と栽培方法について	大西志全
令和７年度普及指導員新任者早期養成研修（スペシャ	北海道農政部	R7.6.26	馬鈴薯の品種特性と育種の方向性及び試験の概要	品田博史

リスト強化研修・畑作・前期）				
道産小麦を知ろう！出前講座（札幌ベルエポック製菓調理専門学校	北海道農政部	R7.7.3	道産小麦を知ろう！	大西志全
稲作経営専攻コース２学年・第１期集中講座	農業大学校	R7.8.15	営農 Navi を利用した経営計画	千川明子
令和７年度普及指導員新任者早期養成研修（新任者研修Ⅱ・前期）	北海道農政部	R7.9.11～12	農業簿記の基礎	千川明子
令和７年度普及指導員新任者早期養成研修（新任者研修Ⅱ・後期）	北海道農政部	R7.9.10	害虫の診断手法	下間悠士
令和７年度普及指導員新任者早期養成研修（新任者研修Ⅱ・後期）	北海道農政部	R7.9.8～10	病害・害虫の診断手	飯田麻衣
日本育種学会第 148 回講演会市民公開シンポジウム	日本育種学会	R7.9.11	近未来の理想の作物を求めて（パネラー）	中村浩
EBC ワークショップ 2025	日本植物病理学会 EBC 研究会	R7.9.16	EBX 研究会で学んだこと、その利活用について	下間悠士
ほっかいどう秋の大収穫祭	総合商研株式会社	R7.10.4	小麦有識者としての参加	大西志全
令和７年度日本パン工業会意見交換会	ホクレン農業協同組合連合会	R7.10.8	令和７年産豆類の生育状況等について	中川浩輔
令和７年度日本植物病理学会北海道部会談話会	日本植物病理学会北海道部会	R7.10.8	きたほなみ R の特性	大西志全
令和７年度普及指導員指導力養成研修（スペシャリスト強化研修・経営・労働）	北海道農政部	R7.10.21～23	経営改善計画の作成・発表	千川明子
令和７年度普及指導員新任者早期養成研修（スペシャリスト研修・畑作・後期）	北海道農政部	R7.11.19	研修生事例に基づく研究検討	中村浩
農業経営者育成研修・農業経営分析コース２期	農業大学校	R7.11.28	経営分析（水平比較）	千川明子

農業経営者育成研修・農業経営分析コース３期	農業大学校	R8.1.22	中期経営計画の作成と発表	千川　明子
オホーツク有機農業ネットワーク冬期研修会	オホーツク総合振興局農務課	R8.1. 23	(R6 指導参考)子実用トウモロコシの有機栽培安定生産技術と輪作体系への導入効果について	飯田　麻衣
「ゆめいころ」知名度向上プロジェクト	オホーツク総合振興局産業振興部農務課	R8.1.28	「ゆめいころ」の育成と知名度向上を目指して	品田博史
令和７年度オホーツク管内普及指導員普及奨励新技術研修会	オホーツク総合振興局	R8.2.4		中川浩輔 斉藤涼介 雨森大 飯田憲司 品田博史 高畠聡史 和﨑俊文 石川圭大 唐星児 板垣英祐 三和優吾
令和７年度高品質てん菜づくり講習会	北海道農産協会	R8.2.5	令和７年産てん菜の生育経過と今後の留意事項	池谷聡
2026 年 HGC 生産者説明会	株式会社北海道グレインカンパニー	R8.2.12	「きたほなみ R」の品種特性及び育種概況について	其田達也
網走農業改良普及センター園芸部会研修	網走農業改良普及センター	R8.2.13	たまねぎのリン酸減肥試験について	唐星児
畑作営農技術研修会	オホーツク網走農業協同組合	R8.2.19	ばれいしょ品種「コナユタカ」の特性紹介 でん粉原料用ばれいしょ「コナヒメ」の安定栽培技術	品田博史 唐星児
令和７年度花・野菜新技術セミナー	花･野菜技術センター	R8.2.24	養分収支よ肥料価格を考慮したたまねぎに対するリン酸施肥指針	唐星児
令和７年度豆作り講習会	日本豆類協会	R8.2.26	豆類の新品種と品種特性 オホーツク地方において問題となる害虫とその対策	中川浩輔 下間悠士
種馬鈴しょ栽培技術研修会	十勝農業協同組合連合会	R8.2.26	道総研のばれいしょ育種と新品種のご紹介	品田博史
令和７年度良質小麦安定生	上川地区米麦改良	R8.3.10	良質小麦安定生産に向けて	中村浩

産技術講習会	協会			
令和 7 年度いも類講演会	日本いも類研究会(一財)いも類振興会	R8.3.11	新品種「ゆめいころ」の普及について	品田博史
常呂町甜菜栽培講習会	JA ところ	R8.3.13	てんさい直播栽培の現状と基本技術	池谷聡
北見 95 号への品種切替に向けた栽培技術説明会	きたそらち農業協同組合	R8.3.25	北見 95 号の栽培技術について	大西志全

3　職員研修

氏　　名	研　修　項　目	場　　所	期　　間
雨森大	新規採用職員研修Ａ(初任者･研究基礎研修)	道総研プラザ	R7.4.8～R7.4.10
池谷聡	新任主幹級研修	オンライン開催	R7.5.13～R7.5.14
池谷聡	安全管理者選任時講習	オンライン受講	
井上哲也	安全管理者選任時講習	オンライン受講	
池谷聡	特別管理産業廃棄物管理責任者講習会	オンライン受講	
鈴木孝子	安全管理者選任時講習	オンライン受講	
雨森大	農業研究本部主催・新規採用研究職員研修	道総研プラザ	R7.6.3
池谷聡	新任研究主幹研修	オンライン開催	R7.6.30
中川浩輔	新任主査級研修	オンライン開催	R7.7.2～R7.7.3
品田博史			
伊藤幸雄	ボイラー取扱技能講習	室蘭市	R7.7.10～11
横川愁斗			
中川浩輔	てん菜研究会第 23 回技術研究発表会[1)]	札幌市	R7.7.16
雨森大	てん菜研究会第 23 回技術研究発表会[1)]	札幌市	R7.7.16
石川圭大	令和 7 年度研究課題立案研修	オンライン開催	R7.9.2～R7.9.3
鈴木美玲			
三和優吾	日本土壌肥料学会(新潟大会)[1)]	新潟市	R7.9.17～R7.9.19
雨森大	新規採用職員研修Ｂ(重要課題研修)	オンライン開催	R7.9.26､11.28､12.19
雨森大	新規採用職員研修Ｃ（他分野体験・交流研修)	林業試験場および林産試験場	R7.10.7～R7.10.9､R8.1.15
池谷聡	シニア研修	オンライン開催	R7.12.11
木場稔信			

柴田匠	フルハーネス型墜落制止用器具特別教育	北見市	R8.12.3
下間悠士	病害虫の発生予察や侵入調査にかかるリスク評価、調査手法およびデータ解析にかかる統計手法の習得 2)	つくば市	R7.12.8～R8.2.6
中出秀信	危険物取扱者保安講習	オンライン受講	
高畠聡史	研究開発能力向上研修（競争的資金獲得研修）	オンライン開催	R8.3.10
佐藤圭 其田達也	日本育種学会第 149 回講演会 1)	茨城県水戸市	R8.3.20～R8.3.21
飯田憲司	日本草地学会第 82 回発表会 1)	島根県松江市	R8.3.27～R8.3.29

1)専門研修Ⅱ
2)専門研修Ⅰ

4　職場研修

研修会および講習会	講　　師	開 催 日
交通安全について	総務課長　古屋幸生	R7.5.29
安全で快適な作業のために	研究主幹　池谷　聡	〃
病害虫汚染防止について	研究部長　平井　剛	〃
規則を守った研究活動について	研究部長　平井　剛	〃
化学物質の取り扱いについて	研究部長　平井　剛	〃
ハラスメントについて	総務課長　古屋幸生	〃
一般事業主行動計画について	総務課長　古屋幸生	

5　国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期　　間
該当無し			

Ⅶ　そ の 他

１　技術体系化チーム

技術体系化チームとしての取り組みはなかった。

２　オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）

オホーツク地域農業支援会議のプロジェクト課題として「大豆間作小麦栽培の対応」について取り組み、越冬後生育・病害調査、収量調査を行い、ニーズ元（JA つべつ、JA オホーツク網走）へ中間報告と最終結果報告を行った。

オホーツク管内の各関係機関より令和 7 年度地域課題・農業試験研究課題ニーズとして 1 件の要望があった。要望の具体的内容把握のため、それぞれ現地聞き取り調査を実施した。

現地聞き取り調査： 12/10　JA ところ

３　表彰・受賞

（1）日本土壌肥料学会 2025 年度新潟大会 若手口頭発表優秀賞（令和 7 年 10 月 28 日）

第 6 部門（土壌肥沃度）：「春まき小麦現行品種「春よ恋」と過去品種「北海 178 号」のリン酸施肥反応の品種間差－現在の試験データおよび北見農試所蔵の戦時中データの比較検討－」

三和優吾・笛木伸彦

４　行事

月 日	行事名
4 月 1 日	辞令交付式(新規採用)
10 日	オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部第 1 回幹事会
15 日	(Web 開催)第 1 回安全管理者会議
18 日	(Web 開催)第 1 回運営推進会議
5 月 12 日	第 1 回農研本部場長会議
15 日	(Web 開催)第 2 回安全管理者会議
20 日	(Web 開催)第 2 回運営推進会議
29 日	職場研修（ほ場汚染防止・労働安全等）
6 月 4 日	(Web 開催)第 1 回研究部長会議
6 日	北海道農業技術推進委員会
	第 2 回農研本部場長会議
17 日	場内新規課題検討会議
19 日	(Web 開催)第 3 回安全管理者会議
20 日	場内見学案内リハーサル
24 日	(Web 開催)第 3 回運営推進会議
24 日	(Web 開催)全国農業関係場所長会議
7 月 3-4 日	新規課題検討会議(畜産部会)
8-10 日	新規課題検討会議
15 日	第 17 回訓子府まちづくり推進会議
16 日	(Web 開催)第 4 回安全管理者会議
22 日	(Web 開催)第 4 回運営推進会議
25 日	(Web 開催)第 1 回オホーツク地域農業気象連絡協議会（欠席）
8 月 12 日	地域農業技術センター連絡会議（NATEC）オホーツクブロック研修会
8 月 29 日	北海道農業試験会議（秋まき小麦設計会議）

9月2日　訓子府町総合計画策定審議会
18日　(Web開催)第5回安全管理者会議
25日　(Web開催)第5回運営推進会議
26日　(Web開催)第3回農研本部場長会議
10月9日　(Web開催)科学技術振興に関する「北見・網走」地域懇談会」
20日　オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部第2回幹事会
23日　(Web開催)第6回安全管理者会議
27日　(Web開催)第6回運営推進会議
31日　作況報告会
11月5日　第4回農研本部場長会議
13日　防火訓練
17日　(Web開催)第7回安全管理者会議
19日　道産小麦品質向上プロジェクト試験成績検討会
20日　馬鈴しょ輸入品種等選定試験及び育成系統連絡試験成績検討会
21日　てん菜輸入品種検定試験等受託試験及び育成系統連絡試験成績検討会
23日　新穀感謝祭
25日　(Web開催)第7回運営推進会議
27日　北見農試現地委託試験成績検討会（Web併用）
12月3-4日　飼料作物品種比較試験成績検討会
9日　場内成績検討会議
11日　第18回訓子府まちづくり推進会議
17日　(Web開催)第2回研究部長会議
1月15日　(Web開催)第5回農研本部場長会議
19日　訓子府町農業関連事業所懇談会
21日　(Web開催)第8回安全管理者会議
19-23日　(Web併用)北海道農業試験会議成績会議
26日　(Web開催)第8回運営推進会議
30日　オホーツク地域農業技術支援会議・五者会議（Web）
2月6日　場内設計検討会議（麦類、畑作）
10日　場内設計検討会議（馬牧G、生技G）
12日　庁舎落成記念式典
12日　第19回訓子府まちづくり推進会議
16日　北見工大社会連携推進センター産学官連携推進員・協力員合同会議（欠席）
18日　(Web開催)第9回安全管理者会議
17-27日　地域農業技術センター連絡会議（NATEC）定期総会（書面）
19日　(Web開催）設計会議　てん菜分科会
20日　農業新技術発表会(全道版)
24日　(Web開催)第9回運営推進会議
25日　オホーツク農業新技術セミナー
3月2-6日　(Web開催)北海道農業試験会議設計会議
10日　(Web開催)第2回オホーツク地域農業気象連絡協議会（欠席）
10日　(Web開催)北海道農業試験研究推進会議本会議
13日　オホーツク地域農業技術支援会議・地域関係者会議
13-27日　(書面)北見農試現地委託試験設計検討会
16日　(Web開催)第10回安全管理者会議
18日　第6回農研本部場長会議

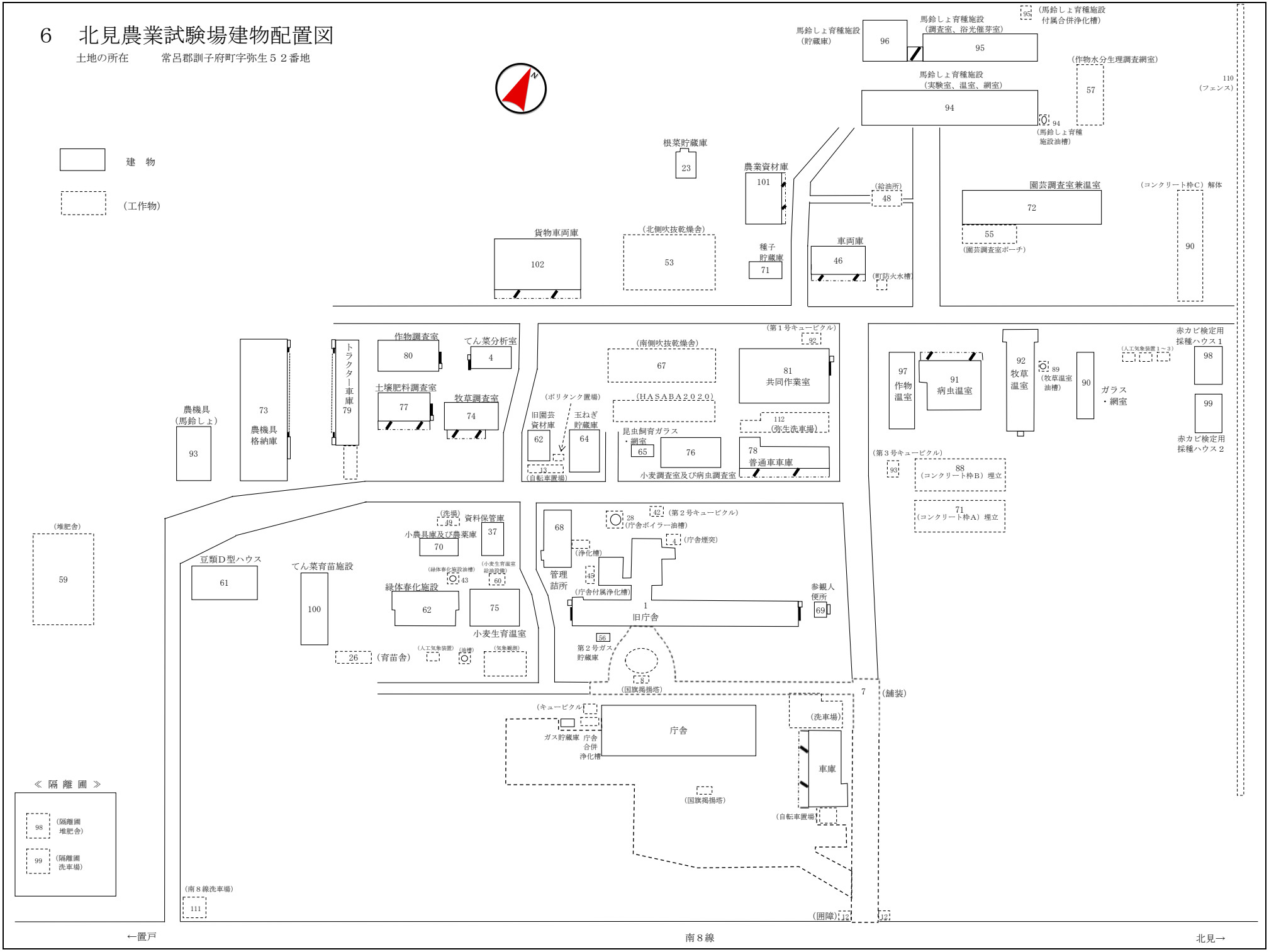
23 日　第 10 回運営推進会議
27 日　北見地区玉葱振興会
31 日　辞令交付式(退職・異動)

5　自己点検への対応

事　　項	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
研究成果発表会の開催件数	1	1	3	2	1(web)	1(web)	1(web)	1	1	1
研究成果発表会への延べ参加人数	169	136	673	325	938(視聴)	492(視聴)	514(視聴)	124	122	129
研究会等の開催件数	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
研究会等への延べ参加人数	39	97	60	0	－	－	－	－	－	－
発表会・展示会等への出展件数	1	2	3	0	1	2	2	2	0	2
研究報告書の発行状況	2	4	－	3	0	0	0	0	0	0
技術資料の発行状況	4	1	－	2	2	0	0	0	0	1
学会やシンポジウム等での発表件数	33	20	25	24	10	17	11	20	18	11
学術誌や専門誌への投稿論文数	16	11	9	9	5	7	5	5	1	4
普及組織との連絡会議等開催件数	9	10	5	3	4	5	2	6	3	2
技術相談件数	85	89	85	76	84	94	99	76	123	107
技術指導件数	56	55	53	59	55	33	33	38	25	14
研究成果の公表・活用状況(雑誌)	31	30	17	20	22	15	15	15	9	8
研究成果の公表・活用状況(書籍)	2	2	1	3	9	5	4	0	0	0
研究成果の公表・活用状況(新聞)	7	3	5	3	8	2	4	2	2	9
技術審査件数	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
利用者意見把握調査の回答数	180	115	145	55	－	－	－	75	49	77
研修会・講習会等の開催件数	2	2	3	1	1	0	0	1	7	4
研修会・講習会等の延べ参加者数	520	308	40	100	27	0	0	10	95	139
研修者の延べ受入人数	0	0	28	8	2	0	0	2	0	0
特許等の出願件数	1	1	3	2	2	0	0	0	0	0
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
視察者・見学者の受入件数	37	38	25	35	0	0	0	22	34	25
視察者・見学者の延べ人数	603	648	359	575	－	－	－	259	388	188
国際協力事業等への協力件数	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0
道関係部との連絡会議等の開催件数	28	20	6	10	0	0	0	0	8	5
市町村との意見交換等の開催件数	5	8	2	0	0	0	0	0	0	4
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(大学等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(研究機関等)の派遣件数	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(企業等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(学会等)の派遣件数	3	4	8	6	0	0	10	4	6	6
国内研修Ⅱ(シンポジウム等)の派遣件数	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
企業等への訪問件数	22	18	29	38	2	3	0	6	7	5
関係団体等との意見交換等の開催件数	24	29	43	9	3	2	0	0	8	2

6　北見農業試験場建物配置図

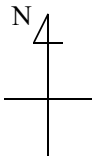
土地の所在　　常呂郡訓子府町字弥生５２番地



道総研
北見農業試験場

令和７年度(2025)作付計画

R7. 6. 3 版
業務委員会事務局



S-1 採　草　地

1-1　1-2 草地（管理）

E3-1 115a 馬鈴しょ（馬鈴薯）

E3-2 107a 馬鈴しょ（馬鈴薯）

S-2 採 草 地

E2-1 115a 春播小麦（麦類）

E2-2 107a 秋播小麦（麦類）

4-10 牧草

4-9 牧草

4-12 牧草

4-11 封鎖（裸地）

E1-1 90a 封鎖（裸地）

E1-2 83a 封鎖（裸地）

山　林

牧草　山隔離圃場

⑪ ③ ④ ⑥ ⑩ ② ① ⑨ ⑦

建物敷地

堆肥盤

山　林

建物敷地

庁　舎

前　庭

南　7　線　（町　道）

温室等敷地	温室等敷地	6-1（病）予察圃	5-1（病）緑肥→秋小・緑肥大豆・馬鈴しょ	5-2（牧）牧　草
コンクリート枠 コンクリート枠	タマネギハウス	6-4（管）草　地	5-3（病）ニンジン・ブッロコリー・てん菜	5-4（病）小豆・緑肥大豆
6-2 ﾄｳﾓﾛｺｼ	6-3 ﾄｳﾓﾛｺｼ			
6-5-1 緑肥大豆	6-6-1 緑肥大豆	6-7（栽）えん麦	5-5（病）タマネギ・馬鈴しょ・えん麦	5-6（病）ハゼリソウ→秋播小麦
6-5-2 春播小麦	6-6-2 秋播小麦			
6-8（栽）秋播小麦	6-9（栽）デントコーン	6-10（栽）春播小麦	5-7（病）秋播小麦	5-8（管）混播牧草（H17 造成）
6-11（栽）緑肥大豆	6-12（栽）直播てん菜	6-13（栽）えん麦 ポテモン	5-9（病）タマネギ	5-10（管）混播牧草（H17 造成）

A 1 217 てん菜（畑作）

A 2 牧　草（牧草）

公　宅　敷　地　（弥生 52）

＊馬鈴しょ採種圃(P-1 ～ 4)の輪作順は
①ヘイオーツ → ②馬鈴しょ → ③普通えん麦 → ④緑肥大豆
そうか病、そう根病

検定隔離圃場

7-2（1.1ha）草地

S-3 採草地

S-6 採 草 地

林地
P4 えん麦
P3 えん麦

7-1（1.3ha）馬鈴しょ そうか病＋えん麦

7-3 てん菜 そう根病

A 6 牧　草（牧草）

馬鈴しょ採種
P2 えん麦
P1 馬鈴しょ

牧草新隔離圃場
4 3 2 1

牧草隔離圃場
8 7

A 3 牧　草（牧草）

至置戸　南　8　線　（　道　道　）　正門　至北見

B 6 － 1 ﾄｳﾓﾛｺｼ（牧草）	B 5 233a 春播小麦（麦類）	B 4 229a 緑肥大豆（管理）	B 3 223a 緑肥大豆（管理）	B 2 231a ひまわり（管理）	B 1 231a ひまわり（管理）
B6-2 草　地					
B 6 － 3 牧草（牧草）					

A 5 221a 混播草地（管理）ﾄｰﾙﾌｪｽｸ＋白ｸﾛｰﾊﾞ（H20 造成）	A 4 221a 混播草地（管理）ﾄｰﾙﾌｪｽｸ＋白ｸﾛｰﾊﾞ（H20 造成）	D 3 218a トウモロコシ（管理）	D 2 211a トウモロコシ（管理）	D 1 245a えん麦（管理）	林　地（沢） S-4 採草地

C 6 230a スズマル（管理）	C 5 230a 豆類（畑作）	C 4 230a 馬鈴しょ（馬鈴薯）	C 3 230a えん麦（管理）	C 2 239a 秋播小麦（麦類）	C 1 244a 秋播小麦（麦類）

第８圃場（旧水稲圃）

公宅用地（若葉 101）　8-2 草地　用水路

8-1（一部ダイコン）草地　8-3 草地　8-4 草地

公宅用地（若葉 99）

至置戸　旧ふるさと銀河線　至北見

北海道立総合研究機構　北見農業試験場年報　令和 7 年度

令和 8 年 11 月発行

地方独立行政法人　北海道立総合研究機構
農業研究本部　北見農業試験場

〒099-1406　北海道常呂郡訓子府町字弥生 52 番地
電話(代表)　　(0157) 47-2146
ファックス　　(0157) 47-2774
HP アドレス　http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html